北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第31号

平成28年7月発行

目　次

０１．バリ島のキャンプ場	・・・	江田　直美	０２
０２．８年ぶりの健康診断	・・・	下村　まゆみ	０５
０３．南洋真珠養殖その３獄中編	・・・	今泉　宏	０７
０４．Banda Aceh について	・・・	大貫　周明	１１
０５．モバイルインターネット比較	・・・	中村　高太郎	１６
０６．鯨を食べよう	・・・	長崎　節夫	３２
０７．白蝶貝の海に潜る　（再掲）	・・・	中林　茂	３８
０８．はじめまして	・・・	高野　智子	６７
０９．編集後記			６９
１０．会員名簿			７０

バリ島のキャンプ場～ブドゥグル、ブヤン湖畔

江田　直美

バリ島の北部、標高約 1500mのブドゥグルは、新鮮な野菜や美味しいイチゴなどの果物で有名な場所です。また、湖に浮かぶ「ウルン・ダヌ・ブラタン寺院」(Pura Ulun Danu Beratan)がある、ブラタン湖は、ローカル観光客で大変賑わっています。

このブラタン湖よりも、更に北に位置するブヤン湖には、公共のキャンプ場があります。キャンプ場と言っても、広場のような所で、日中は近所の小学生が体育の授業などで使っていたり、ドライブ休憩で立ち寄る人がいたり 、夕方は少年たちがサッカーをしに来ていました。

ブヤン湖に到着後、すぐにテントを張り、暗くなる前に寝床の準備。車も乗り入れ出来ます。
決して綺麗とは言えない、、、トイレと壊れて使えないシャワー室も、一応ありました。(近所には有料で、トイレとシャワーを貸してくれる所があります。)

私たちが訪れた平日は、どちらかと言うと、閑散としていました。その静けさの中で、自然の景観を楽しみ、ほぼ自分達だけの贅沢な時間を味わう事が出来ました。。。本当に楽しかったです。

ここで潔く、デンパサールに戻れば良かったのですが、あともう 1 泊しようと欲張ったのが間違いでした。

週末に入り、若者のグループが何組も訪れて、最初は賑やかで良いね！なんて思っていたのですが、、、そのうち音楽ガンガン、なぜが眩し過ぎる光線まで飛び交い、ほとんど寝られませんでした。深夜から明け方まで、各グループで楽しい時間を過ごされ、満足そうに帰って行かれました。(今は笑い話ですが、あの夜は笑えませんでした。)

気を取り直して。キャンプ場で楽しんだ事を書いてみたいと思います！

①釣りをしました。

湖畔ぎりぎりの所で、(落下に注意です！)釣りをしている人が沢山いました。日中は暑く、我が家は戦利品ゼロで早々に退散しました。

でも、透明度の高い湖面に、周りの木々や空の色が、鮮明に浮かび上がり、本当に綺麗でした。夕方から、釣り目的でやって来る人達もいましたよ。

②ハイキングをしました。

ブヤン湖Ⅱと呼ばれる地点があると、テントをレンタルしたお店のお兄さんに聞いたので、行ってみました。

道中は、でこぼこ道あり、それを過ぎると、まさに森林浴～を楽しめる道が続き、鳥のさえずりも聴こえて来て、気持ちが良かったです。

③番外編Ⅰ～地元の人達との会話

地元の売地情報まで教えてくれた、体育の授業で来ていた学校の校長先生。
(買えませんが 、、、。)

私たちが外国人だと思って？、英語で話すフレンドリーなツアーガイドのお兄さん。
(どう見てもローカルな格好の我が家でしたが、、、。)

デンパサールに住んでいる、息子さんとその彼女のお話までしてくれた、薪を売っていたおばさん。
(私が尋ねた訳ではありません。)

ハイキング中、道に迷った私たちに道案内してくれたバイクのおじさん。
(一度、ありがとう～と言って別れたはずのおじさん。私たちが間違えた地点まで戻ったら、何とそこにはアノおじさんが。私たちを心配して、わざわざ来るのを待っていて下さったんです。)
等など、ありました。

④番外編Ⅱ～Bali TreeTop Adventur Park

ここは最初の計画では、入っていない場所だったのですが、、、。

ツリーハウスがある公園があると聞いて、向かったのですが、鎖がかかっていて遊べず、、、。すぐ目の前にあったのが、ココでした。

Bali Treetop Adventure Park は、バリ植物園(Kebun Raya Eka Karya Bali)の中にあります。植物園の広さは、何と 157 ヘクタールもあるそうです。敷地内では、お弁当持参でピクニックをする家族や、レクリエーションで来ているグループや学生さんたちが沢山いました。

Bali Treetop Adventure Park には、自然の木々の上に作られたアスレチックが、難易度別に 7 コースもありました。小さな 4 歳くらいの子供が楽しめるコース、バランス感覚や腕力がかなり必要なコースもあります。難易度が高くなると、高所からロープを持って、ターザン！ジャーンプ！！スリル満点で、かなり勇気が必要です。

娘も少し低い位置からのターザンジャンプに挑戦。飛び降りるまで時間がかかりましたが、何とか成功！

子供には、まさに自然の中のアドベンチャー、大人も真剣勝負？出来るコースが揃っていて、子供から大人まで、充分に楽しめる場所だと思います。

8 年ぶりの健康診断、主にピロリ菌のお話し。

下村　まゆみ

自慢ではありませんが、というのは謙遜で、実は自慢ですが、インドネシアに移住して 8 年間、私は一度も医者にかかりませんでした。健康自慢で、とりわけ胃腸が丈夫で、衛生観念が平均的日本人以下であろう私には、不衛生なインドネシア生活に耐える素養があったのだと思います。

インドネシアの医療事情については私がここで述べるまでもなく皆様ご存知でしょうが、例えばインドネシアっぽい感じでいきなり高熱が出た時、なぜ人は病院へ行こうとするのか？症状を緩和したいのはもちろんのこと、発熱に至った経緯を知りたいからですよね。しかし、北スラウェシで私が出会った医者はその説明をすっ飛ばして薬を出して終わり。要するに、原因・経緯を特定するだけのスキルも臨床経験もないのです。そんな医者にかかるくらいなら、自力で治して自然治癒力・免疫力を高めようじゃないか！というのがインドネシアにおける私のスローガンでした。

現代医療難民だった私は、8 年ぶりに日本へ戻り、国民健康保険の恩恵を受けまくり、現代医療の恩恵を受けまくりました。『JIN-仁-』という漫画は、「現代の医師が、もし幕末にタイムスリップしたらどうなるか？」を描いた作品ですが、さしずめ私は「幕末の患者が、もし現代にタイムスリップしたらどうなるか？」という疑似体験をしたってところでしょうか。

帰省後まずは三大がん検診と婦人病検診を。そして早速「ピロリ菌陽性」が出ました。ピロリ菌というの、私は初耳ながら、ネット情報によれば以下のとおりです。

①胃の粘膜に生息している螺旋形をした菌で、主に胃や十二指腸などの病気の原因になる。
②免疫力が弱い 0 歳～5 歳までの乳幼児期に感染するもので、大人になってからの感染は稀である。
③ピロリ菌陽性者（感染者）は一般的に発展途上国に多く見られ、欧米先進国では少ないとされている。
④日本は、先進国の中ではピロリ菌の感染率が高く、今の 50 代以上（上下水道が完備されていなかった時代に乳幼児期をおくった世代）の 50%以上が感染者であると言われている。

アラフィフの私は④に当てはまります。しかし、私が 5 歳の頃までの日本と、現代のインドネシア（のなかでもマナド、ビトゥン界隈）とを比較した場合、どう考えても現代のマナド、ビトゥン界隈の方が明らか不衛生ではありませんか？下水道など無いに等しく、井戸水は使いまくり。煮沸後にコーヒーなどにして誤魔化さずそのままストレートで飲むと変な味がする井戸水、普通にありますもの。

そこで、看護師さんに尋ねたところ、（私の場合は）「インドネシアで井戸水から感染した可能性は大いにありますね」とのこと。やっぱりねーって感じです。インドネシアで感染した場合は、今ここで除菌をしても、再びインドネシアへ戻れば感染する可能性が高いわけで、悩ましいところです。

余談ですが、ネット情報によれば、日本型のピロリ菌は胃がんリスクが高いそうです。一方で、インドネシアのピロリ菌は欧米型。欧米型のピロリ菌は胃がんリスクが低く、実際インドネシアには胃がん患者が少ないそうで。ということは、インドネシアは自国のがん患者の統計を出しているんですか？がん患者の統計の前に、がんをがんと診断できる医者の統計をまず出して欲しい気がしますけれども・・・。

南洋真珠養殖　その３　（獄中編）

今泉　宏

前号ではビトン編を予告しましたが、気が変わって「獄中編」に変更です。そうなんです、実は私、インドネシアで投獄された経験を持っています。と言っても正式にはイミグレに拘束された人が一時的に収容されるカランティナという留置場ですが。カランティナというと通常は検疫所なのですが何故かイミグレの留置場はカランティナなのです。検疫所とイミグレの関係は分かりません。。。

時は 2001 年、場所は中部スラウェシ州パルー市。当時新漁場の開拓を模索していた覚田真珠の社命により私はパルー市とトリトリ市周辺海域を調査していました。

一番大事なことは真珠がよく巻くこと、稚貝が育つこと。なのだけど、ぶっちゃけそんなことはやってみなきゃ分かりません。では、何を基準に漁場を選ぶのかというとそれはほとんど「勘」ということになります。あとは生活や交通の便のできるだけいいところ。そのあたりを押さえておけば経費が安く済むので多少真珠の出来が悪くても何とかなります。

逆に大自然が一杯の超僻地なんかを選んでしまうと移動、物資の輸送に時間と手間とお金がかかり、水、電気などの生活基盤も自分で整備しなきゃならないから電気や機械等の専門的な知識もいるし初期投資もランニングコストも高くつきます。

それでもめっちゃいい真珠ができるとなれば苦労した甲斐もあるというものだけど往々にして真珠のできは大自然の美しさと比例する訳ではないのです。

しかし、何故パルーなのかと言われると少し返答に困ってしまいますが、恐らくビトンから南の海岸からゴロンタロ、ルウク、トギアンなどがあるトミニ湾では真珠が巻かないという話は業界でもよく知られており、マナドから西の海岸は落合さんの縄張りのような感があり、それではそのさらに西南方となると拠点がマナドからパルーになるとそのような流れがあったのだと思います。ケンダリ市のある東南スラウェシ州などはインドネシア南洋真珠養殖発祥の地ブトン島などもあり養殖場に適する地形が多く見られる地方ですが、そのような場所には当然大きな養殖場がありますので候補から外れます。

ま、適当っちゃ適当な選択だったパルーですが同業者さんも見当たらず、と言うか外国人がほとんどいません。でも、ホテルで聞き込んでみるとやっぱいましたね同業者さん。堀口真珠さんと志摩商会さんがパルーとは半対岸のトミニ湾周辺で養殖をやっていたのだけどパルー経由で現場へ行く場合もあるようでこの 2 社の名前はすぐに耳に入ってきました。トミニ湾ならルウク市が拠点になるはずなのですが当時はまだ飛行機の便も少なかったためかパルーから陸路でルウク入りなんてこともやっていたようです。中部スラウェシ州の州都であるパルーでしたが当時はホテルもまともなホテルが 2 軒あるだけだったので偶然同業者さんと顔を合わせるなんてこともありました。その頃はまだまだ真珠養殖屋も日本人技術者を多く抱えており出入りも激しかったのです。

パルーでは覚田真珠と親交のあった志摩商会さんの関係者でルスランという男を紹介されたので運転手兼案内人として何度か使っていたのだけどこの男がとんでもない野郎で違法薬物の常用者だったのです。ある時約束の時間を過ぎてもなかなか現れないので心配していたら前の晩に車をひっくり返してしまったのだとか。それがどうも問い詰めると友達とラリっていたのが原因だったのです。それでルスランとはきっぱり手を切ったのだけど、パルーという町はなんだか違法薬物が身近にあるような町という印象も感じました。

その後ラベアンという村が面している湾に選択肢を絞ってテスト用の筏を設置しビトンから稚貝を移送し育成を始めました。

ある時村の有力者に連れられて村人と話す機会があったのだけどその中にポソの暴動の時人を殺したことがあるという人に会いました。他にも黒檀をフィリピンへ密輸し帰りにピストルと薬物を積んで帰って来たという人や、薬物の密輸で牢屋に数年入っていたという人など、やっぱり、、、かなりやばい地域だったみたいです。

その話の後はやくざの親分に見えてきた村の顔役によると「そんなことしなきゃ食っていかれないから仕方なくやっているけど本当は会社が村にできて村人を雇ってくれて毎月給料を払ってくれるようになればそれほどありがたいことはない」と言い、とてもよく協力をしてくれたものです。

テスト筏を設置して稚貝の育成が始まった後は数ヶ月ごとに観察と貝掃除のためにこの地を訪れていました。そんなある日、貝掃除を終えて帰路につくと後ろから呼び止める車があり何事かと停まるとイミグレの職員でパスポートとキタスを提示しろと。その時パスポートのコピーしか持参しておらずそのように言うとまずは賄賂の請求。こちらが拒むと今度は問答無用でホテルへ行き荷物をまとめて前述のカランティナ送り。ようするにパスポートとキタスがあれば問題ないのだけどパスポートはビトンに置いてきて、ビトンから届けてもらうにもマナド、

パルーの便は 2 日か 3 日に 1 回だったから運悪く 1 晩は牢屋で過ごさなくてはならなくなってしまったのです。

まぁ、なんとかなるだろと楽観していたのだけど実際カランティナへ行き鉄格子の中へ入り、小さな窓しかない個室へ入れられるとさすがにショックで心が折れそうでした。

何よりも辛かったのはベッドのシーツが汚れていて黒ずんだ枕が臭かったことです。

こりゃいかんと思っていたらイミグレの副所長が部屋の鍵は閉めないし、鉄格子も出入りは自由だからと。それどころか食事は監視員に言えば何でも買ってきてくれるし飲みたければビールを飲むのも自由とのこと。よく言う臭い飯は食わずにすみそうです。さらにさらに、もしホテルに泊まりたければ監視員を連れて行き隣の部屋に待機させればそれも可能とのこと。さすがインドネシア！やっぱええなぁインドネシア大好き！でも、だったら今まで泊まっていたホテルをチェックアウトする必要なんかなかったじゃん。まぁいいけど。

ところで何であんな田舎の村までイミグレ職員が追いかけてきたのか？実は私が捕まる少し前にＳ社さんの技術者数人が無許可で労働をしていたということで強制送還になっていたのです。そこへまた日本人がウロウロしていたので誰かに通報されたのでしょう。

そして獄中生活が始まりました。副所長たちが帰っていくと監視員のおじさんとその奥さんと子供だけになりました。おじさんはカランティナに付属している宿舎に家族と住み込みなんですね。

とりあえずビトンの事務所に電話をするためにワルテルへ行きました。昔は携帯がまだ普及していなかったからワルンテレフォン、通称ワルテルがあちこちにあったんですよ。ビトンにいた上司に成り行きを説明してパスポートを送ってもらう段取りをしてもらいその後は自由時間です。

ゆるゆるのイミグレの対応にすっかり気が緩んだ私は取り合えず腹ごしらえとワルンでナシブンクスとビールを買い、パルーの夕日を浴びながら牢屋の庭でナシブンクス アンド ビールです。監視員にも酒を飲ませすっかり意気投合。最初命令口調だったおじさんもすっかり骨抜きになり私の言いなりになってきました。そして日は暮れ、通常はお遊びタイムですがさすがに留置されている身でバーに出入りする気にもなれず取り敢えずホテルへ泊まろうということになりました。

近くの安めのホテルに入ると隣の部屋の監視員から電話がありマッサージを頼みたいのだけど、、、いいよいいよそれぐらいなら、と 5 万ルピアを払ってあげました。そしてしばらくするとまた電話があり、実はマッサージをしてもらっていたら女が勝手にきわどいところを触る

もんだからついついチョメチョメしてしまい勝手にやってきたくせにお金を出せと言うんだ、と。そりゃそうだろ！そんなもん自分で払えよ！とつっぱねると今お金がないから 10 万ルピアだけ貸してくれないか、と。仕方ないから貸してあげました。そしてこれを境に完全に上下関係は入れ替わり監視員は私の下僕と化してしまったのです。

そして翌朝は日の出前にホテルを出てカランティナへ戻りました。一応留置されている身なので日の出ているうちは留置場にいないといけないようです。帰ると監視員の奥さんが恨めしそうな顔をして出迎えてくれました。きっと外国人が留置される度に同じようなことをして奥さんに咎められていたのでしょう。それを見た私は調子に乗ってお金はいつ返してくれるのよ、返してくれなきゃ奥さんに告げ口しちゃうよ～、と散々痛ぶって暇つぶしにしていました。

そうこうしているうちにビトンからパスポートとキタスを持った事務長さんが現れ無事に監獄生活を終えることができました。その後も何度かこの地を訪れましたが行くたびに私はカランティナを訪問し監視員のおじさんを痛ぶり、ささやかながらイミグレに対する仕返しをしたのでした。

Banda Aceh について

Bitung 大貫 周明

皆さんこんにちは。
今年に入ってから、仕事で Banda Aceh に行く事が多くなり長期滞在しております。
なので、今回はスマトラの端っこにある Banda Aceh について少々書いてみようと思います。

皆さんは Aceh と聞くと、まず ”津波” を最初にイメージされる方が多いと思います。
2004 年の 12 月 26 日にアチェ州の人口 400 万人のうち 20 万人以上の方が犠牲となった スマトラ島沖地震。スリランカやプーケットなどの犠牲者を合わせると２８万人以上で 1700 年以降では最も被害の多かった地震となります。マグニチュードは 9.1。

Aceh 州の 州都 Banda Aceh 市では人口 25 万人のうち 3 万人超が犠牲となりました。
地震後わずか 30 分で津波が到達。その津波の高さは 6～12m だったと言われています。
スマトラ島沖地震での最大の津波高は Banda Aceh から約 20km 南下した半島で、なんと 48.9m もあったそうです。この津波高は世界最高記録とのこと。

実際に、Aceh のマグロの加工場のスタッフから話を聞くと、身内の方を亡くした人がいくらでもいます。私のビジネスパートナーの船主のバカールさんはちょうど漁に出ていたので助かりましたが、家族の中では 1 人だけ生き残ったそうです。

しかし Aceh の多くの人々は大津波は神が与えた試練と考えており、試練の後には大きな恵みがもたらされたのだと言います。
確かに被災のあとの Aceh は、50 億ドル（7000 億円）にのぼる国際援助を得て、Aceh の街は、それは見事に復興しております。30 年続いた内戦も終わり平和にもなりました。

Aceh 市では大津波の教訓を後世に伝えよう、さらには観光資源にしようとの方針で民家に乗り上げた漁船や、市内中心まで流されてきた大型船を保存し公園にしました。
津波博物館や記念公園もつくられ、今では国内外から多くの人々が訪れております。

さらに、Aceh 市内には、あのジャッキー・チェンが資金を出して建設した復興住宅村があり、これもジャッキー・ビレッジという観光地になっております。また、わずか２ヘクタールに約４万７千人もの犠牲者が何層にも重ねられて埋葬されているシロン集団墓地ですが、墓石は無く一面がだだ広い芝生の広場になっております。ひろい広場にすることで、この下にはそれだけ多くの犠牲者が眠っているのだという 実感が湧いてきます。

津波で３km も内陸に流されてきた大型発電船

TSUNAMI 博物館は定番の観光スポット

津波で破壊された家は公園として保存

家の上にのっかった漁船は Aceh のシンボル

日本では東日本大地震で気仙沼で陸に打ち上げられた大きな船は撤去されてしまいました。それは、安全面の不安と船を維持するのに費用が掛かるという理由でしたが、実際には、その船を見るたびに被災者が津波の悲劇を思い出すので、というのが本音であると聞いたことがあります。

個人的には Aceh のように”負の遺産”として災害教育や津波の恐ろしさを伝えるためにも残すべきと思うのですが。

そして、Aceh には大津波のあとに大きく変わったことがもうひとつあります。

それは治安です。大津波以前は Aceh 州はたいへん治安が悪い地区でした。

インドネシア国軍と独立派ゲリラの激しい内戦が繰り広げられていたからです。

もともと Aceh 州はインドネシアの独立時からインドネシアに併合されていることに不満があり、スハルト政権時代には自由アチェ運動 GAM というゲリラ組織が発足。

それ以降は紛争・内戦が続いており、立ち入り制限地区でもありました。

ところが、大津波で状況は一変、内戦やっているどころではなくなってしまいました。

ゲリラは武装解除と独立要求の放棄に応じる代わりに、自由アチェ運動は合法政党へと変わりました。現在では Banda Aceh はとても治安が良い地区となっております。

それと、Aceh を語る上で忘れてはいけないのはイスラム教です。

Aceh には 2 つの法律があります。それはインドネシアの通常の法律とイスラム法(Sharia 法)です。Sharia 法とはコーランと預言者ムハマンドの言行(スンナ)を法源とする法律です。あの「目には目を」ってやつです。

なぜインドネシアの Aceh 州だけに 2 つの法律があるのか調べてみました。

上で書いた通り、独立運動が盛んだった Aceh 州では、鎮静化を目指したインドネシア政府が 2001 年に Aceh 州に一定の自治権を与えました。その中に Sharia 法を導入する権利も含まれており、合意後は Aceh 州は Sharia に基づく多くの規制を導入しました。

Sharia 警察は一般市民の服装を厳しく監視しており、女性のジルバブ着用（Aceh では女性のスカーフ着用は義務）の検問や、未婚女性の処女検査なども行うそうです。

近年はこれらの事柄に対し、国際的な人権保護団体が人権を侵害していると提言していますが、今でも Sharia 警察は住民に対し公開ムチ打ちの刑を見に行くように推奨していたりするのが実情です。

ちなみに公開ムチ打ちの刑の基準は

結婚前に異性と親しくした者： 3～9 回（公衆の前でキスした者は最大 45 回）

賭博を行った者： 6～12 回　、飲酒した者：40 回　、同性愛：100 回　など

今年の初めには異教徒のクリスチャンにも酒の販売でムチ打ちの刑が行わました。

なんと、Sharia 法は外国人観光客にも適用されるそうです。

異性の同級生とただ歩いていただけの女学生も Sharia 警察はムチ打ちの刑にしました。

https://www.youtube.com/watch?v=S6ZKwgTBD8s

他にも YouTube で Aceh,Whipping と入れて検索すれば Aceh のムチ打ち刑の様子がなんぼでも見れます。

Aceh での正しい女性の服装はこれ

かわいい絵だけど、ちゃんと守らないと…

宗教警察に捕まっちゃうぞ。

Aceh の物産品

昨年、数日かけて Aceh 州を車で隅から隅まで走りました。

マグロがあるか小さな漁村を回りましたが、色々な小魚が豊富で海老やカニも沢山。

まだまだ未開の地が多いのですが、山奥の川では砂金が取れるし石油やガスも出る。

大変資源にめぐまれた土地なのです。

Aceh はコーヒー栽培が有名ですが、ウラの名産品としてマリファナがあります。

Aceh の山岳地帯ではインドネシアでも最大の麻畑があり、品質も良いとの評判です。

元来、Aceh ではコーヒーや料理に麻の葉や実を入れて消費されていました。

これは別にトリップすることが目的ではなく、調味料のように風味や味を楽しんでいたのです。なので、今でも街では簡単に手に入ります。

Aceh のデキる男の条件とは

「大貫よ、Aceh のデキル男はコーヒーショップにいるのだ」と、よく聞かされます。

実際に Banda Aceh の街中にはコーヒーショップが至る所に無数にあります。

仕事が出来る男には行きつけのコーヒーショップが各エリア毎にあり、一日の多くの時間をコーヒーショップで過ごします。そこで情報交換や商談、役人との交流が行われるのです。確かに市長も軍のお偉いさんもいます。彼らは事務所でなんか話しません。

ですので、Aceh ではデキル男は、つねにコーヒーショップにいるのです。

コーヒーは一杯 Rp 5,000 程度
デキる男は毎日 6 杯は飲む
うすめのコーヒーで砂糖はたっぷり。
朝、昼、晩といきつけの店があり
コーヒーショップにはお祈りをする
場所も併設しているところ多し。
スターバックスは高くて人気がない
つまりスタバにデキる男はいない
これが Aceh のビジネスの基本法則

Aceh の未来は明るいか？

地下資源や農水産物が豊富な Aceh。津波跡地の観光資源化に成功し治安も良くなったのですが、やはりイスラム法がゆるくならない限りは、さらなる大きな発展は難しいと思います。微力ながら Aceh の発展に協力をしたいと考えている僕でさえも、時々でいいからビールも飲みたいし豚も食べたい。ネットで H なものも見たい。アチェではそのような情報は Web で閲覧出来ないようになっている。それらのためにわざわざ Medan まで行くのも大変だ。。となると、いよいよ俺が異教徒アチェ自由運動を発足させて立ち上がるしかないのであろうか。同志求む。

以上

モバイルインターネット比較

中村　高太郎

会員の皆様はご存知の通りですが、最近は、マナドでは、いたるところに光ファイバ回線が敷設されるなどインターネット環境が充実してきております。料金については、いまだに固定回線は日本よりもやや高く、速度は遅いといった状況。もちろん以前よりも実効速度向上と少し安くなり進歩しましたが、物価差を考慮すると、まだまだ日本よりも割高感があります。また、新参者として、携帯電話の方もスマートフォンの普及で４Ｇ（ＬＴＥ）や３Ｇのデータ通信需要が増し、これらの新しい方式の電波に対応したエリアが充実してきました。ＬＴＥや３Ｇのモバイルデータ通信は、固定回線と違い、日本と比較しても料金では安く、また物価差を考慮しても十分対抗できるのではないかと思います。４Ｇ－ＬＴＥという言葉は、つい数年前までインドネシアでは聞くことがありませんでした。しかし瞬く間に普及してしまいます。これが、インドネシアのすごいところです。日本は石橋をたたいているのか、計画から着工・実現までが、とても長いです。もっとも、早い普及の理由として、電波監理や審査などがしっかりしていない、見切り発車といえば、それまでですが、、、

それで今回は、上記に的を絞って、煩わしい手続きなしに、お手軽に始められる、携帯電話によるインターネット＝モバイルインターネットを特集したいと思います。

●まず、モバイルインターネットの利点ですが、スマートフォンやモバイルルータ（日本ではポケットＷｉＦｉなどと呼ばれることもある、こちらではＭｉＦｉと呼ぶようです）があれば、ＳＩＭカードを購入しプルサ※をチャージしたのちインターネットの通信容量を申し込みプルサで購入すれば即使える点が便利です。これら設定（スマートフォンに限る）とプルサの購入は、ＳＩＭカードを買うときに、ついでに依頼するとやってもらえると思います。出先でも使え、ＡＤＳＬや光ファイバなど固定回線に比べ、煩雑な手続き（申し込みや支払い方法など）や工事までの時間も要しません。

欠点も当然あります。これは、電波を使う関係上、光回線に比べ、遅い、不安定（突然つながらなくなったり、高速になったり低速になったり）、ＡＤＳＬや光回線と違い使い放題ではない（ただしＬＴＥ回線に至っては各社プロモーションをしており、プロモーション特典を考慮すれば、十分対抗できる料金になっています）などがあります。

※プルサについて、、、

インドネシアでは、携帯電話といえば、必ずこの用語が出てきます。ＳＩＭカードはプリペイド方式で、「プルサ」と呼ばれる日本でいう昔のテレホンカードの通話度数に相当するもの（今風に言えば仮想通貨みたいなものか？）を購入してチャージする事で使用します。（日本の携帯電話と同じような契約方式のポストペイド方式もあるにはありますが）プルサは通常、露店で販売されており町まで出なくても近所で購入可能です。プルサは、バウチャータイプ（カードのスクラッチ部分をコイン等で削ることで記載されている番号が出てきて、その番号を電話で入力する事によりチャージする）方式とＥ－プルサ（ＥｌｅｋｔｒｉｋＰｌｕｓａ）と呼ばれ、店員に番号とお金を渡し、直接その番号にチャージしてもらう方式があります。現在は、殆どＥ－プルサ方式です。またプルサ売りのところでは通常プルサ以外にＳＩＭカードも販売しています。２０１６年からＳＩＭカードを購入時は、身分証明書（インドネシア人ではＫＴＰ、外国人ではパスポートなど）を提示し個人情報をキャリア（携帯電話サービスの会社）に登録することが義務付けられたようです。これらの作業は、プルサ売りがやってくれるので、身分証を提示するだけでよいです。（身分証のコピーなどは必要ありません）

ここで注意ですが、日本と違う点は Rp50,000 のプルサは実際に販売されるときに Rp52,000 とか Rp53,000 とかで販売されています。これは、普通の日本の方であれば、必ず戸惑い、違和感を覚えるところだと思います。日本であれば、メーカーが示した希望小売価格よりも高くなることは、まず、ありませんが、インドネシアでは、プルサに限らず高くなることが常です。従って、定価＋α（店側の儲け）ということになります。特に価格が提示されていない場合（プルサは殆ど表示されていますが）は、吹っ掛けてきている可能性もあり、交渉の余地ありです。しかし、上記のようなことから、どんなに交渉しても定価以下にはならないのが普通です。

●それでは次に、現在、マナドで使用できるモバイルインターネットのキャリア（こちらではオペレータと表現することもある）としては、以下があります。ジャカルタなどは、ネット専用のＢＯＬＴというキャリアも存在します。

①ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ	（３Ｇ/４Ｇ）
②ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３	（３Ｇ）
③ＸＬ	（３Ｇ/４Ｇ）
④３	（３Ｇ）
⑤ＳｍａｒｔＦｒｅｎ	（４Ｇ）

※ＴＥＬＫＯＭＳＥＬの４Ｇは、マナドでは、使用電波帯が変則的なため、スマートフォンやモバイルルータによっては、使えない場合が大いにあります。

特に①～③までは、インドネシアの３大携帯電話キャリアといえます。
ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３と３はジャカルタなど大都市では既に４Ｇも展開していますが、マナドでは、この原稿を書いている時点で３Ｇのみ対応です。マナドでの４ＧはＴＥＬＫＯＭＳＥＬとＸＬとＳｍａｒｔＦｒｅｎとなります。

①ＴＥＬＫＯＭＳＥＬは、日本でいうドコモのような位置づけで、一番信頼性が高く、通話エリアも広く、他のキャリアの電波が入らない田舎や離島でも使用できる場合があり圧倒的な人気です。しかし、料金が高いのが難点です。

②ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３は、日本でいうＡＵのような位置づけで、やや安めでお手ごろだといえます。通話エリアや信頼性は、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬより劣りますが、通話料金やネット接続料金がやや安めに設定されています。

③ＸＬですが、日本でいうところのソフトバンクにあたります。といってもマナドでは３やＳｕｍａｒｔＦｒｅｎよりも人気がない会社です。理由は後述します。人気のあるなしは、プルサ売りのところでＳＩＭカードも売っていますが、そのカードの在庫を見れば一目瞭然です。
ネット接続の料金体系やプロモーションではどこにも負けないですし、通常時はネットも快調ですが、一番問題のある点としては、ＸＬの場合、システムが不調なのかプルサがチャージできない時が多々あります。（プルサがチャージできなければ、使い捨てとなります）

プルサをめぐるトラブルは次のようなものがあります。通常プルサは、Ｅ－プルサの場合、購入後プルサ売りがプルサ販売用携帯電話やＰＣを操作してから、十数秒～１分程度でプルサを購入した対象番号にショートメールなどが届き、携帯電話の簡単な操作で残高を確認できるようになっています、しかし、モバイルルータにＳＩＭカードをセットしている場合、プルサがいくらチャージされたか簡単に確認できません。スマートフォンなら問題ありませんが・・・１００％チャージできればよいのですが、ここは、インドネシアです。いろいろな要因でチャージできないことがあります。まずキャリアの問題（アクセスが集中しているとかサーバの調子が悪いとか）があります。このときは、処理中であれば成功かエラーになるまで待つ必要があり、エラーになれば、即時返金対象です。次に多いのが、プルサ売りが、番号を間違えて入力した場合です。これは、できれば購入時は事前に電話番号をメモしたものを渡すと、言った言わないが回避できると思います。立証できれば返金もしくは正しい番号で再チャージ対象で

す。そして、最後に自分が電話番号を言い間違えたなどです。この場合、当然返金対象ではありません。

プルサのトラブルは、その場でチャージできたか、確認することが大切です。あとからプルサ売りのところに行っても、相手にしてもらえません。そして、万一プルサがチャージされない事がその場で確認できたことが前提ですが、その場合、その場でプルサ売りに状況をチェックしてもらいチャージエラーなどであるなら再度実行してもらうか返金をしてもらうなどの交渉が必要になります。（プルサ売りは、チェックしてエラーなどが記録にあり在庫から引き落としが中断または差し戻しされていれば、即返金に応じてくれますが、エラーが記録になく、問題なくチャージされたようであるが実際はチャージされていない場合は、更に、プルサ売りは自分の在庫（残高）を確認します。在庫も減っている場合は、大抵「処理が遅れていると思うから、５分程度待ってくれ」とお客に説明します。それでも、プルサがチャージされず、プルサ売りの在庫も戻っていない場合、更にプルサ売りがプルサ売りの元締めに調査や返金交渉することになります。そのため大変待たされます。額が少しのプルサの場合は、プルサ売りの判断で返金ということもあるかもしれません。しかし、ネット利用の場合、Rp50,000 とか Rp100,000 とかの度数を買うことになるので、プルサ売りも簡単に返金というわけにはいかないでしょう。）

なお、銀行口座を持っていれば、ＡＴＭやネットバンキングなどで直接購入でき、プルサ売りから購入するよりも若干お安く購入できます。さらに自身がプルサ売り（注）になれば、もっとお安いですし、思いのままです。

注）営利目的（プルサ売りの元締めになろうという魂胆など）で会社を興したりすると、プルサを売るための就労許可を得ないと不法滞在となってしまう場合があります。（プルサ売りの仕事で就労ビザが下りるとは思えませんが・・・笑）

●次に、３大キャリアでのネット通信料金を比較してみましょう。

ネット通信料金比較（プロモーション込,10GB 付近で調査）２０１６年６月現在

キャリア	料金	容量	詳細 プロモーション条件等
TELKOMSEL	Rp.500,000-	16.4GB	9GB + 5.4GB(00-09)＋2.0GB(4G のみ)
INDOSAT IM3	Rp.125,000-	13.5GB	8.5GB+1GB(09-17)+4GB(00-06)
XL	Rp.59,000-	12.0GB	2GB(3G/4G) + 10GB(4G のみ・ボーナス)

ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３は更にボーナスとして４Ｇが無制限となる割安プランも存在しますが、マナドでは、使用できません。また、上記のＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３の 13.5GB は、プロモーションのＳＩＭカードの価格となっており、更新する場合は、Rp.199,000 と割高になります。電話番号は、変わってしまいますが、使い捨てがお得となります。

上記を見るとＸＬが断然お安いことが分かります。しかし、３Ｇだけのエリアに限定していえば、ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３がお得であることになります。ＴＥＬＫＯＭＳＥＬは論外ですね。日本より安いとはいえ、現地では、かなり高い感じです。しかし、田舎や離島では、携帯電話の電波の関係でＴＥＬＫＯＭＳＥＬしか選択肢がない場合もあると思います。もちろん電波が入らなかったりする場合はどうしようもありませんが・・・

また注意点としては、最近は４Ｇ普及のため、各社がプロモーションを実施している点です。このため、例えばＸＬでは、2GB+ボーナスで 4G に限り 10GB オマケとなっています。通常はオマケがレギュラーより大きいというのも変ですが、そのようになっています。これは、将来的にボーナス分がなくなるなど見直される可能性があるということです。もちろん、ボーナス分が増えるということも考えられます。

プロモーションは一定期間のものもあり、また期限を切ってなく会社の都合（一定ユーザ数を獲得したなどで）で終了するものもあります。年末年始やイスラム教の断食明けなどに的を絞ってプロモーションが実施されることもあります。

インドネシアは、優柔不断なところがあります。正規分として 12GB にしてしまうと、あとで減らすのも大変です。年々インターネットは安くなる傾向にありますが、ボーナスやオマケ部分は変更になる可能性も十分考慮する必要があるでしょう。この原稿を書いている６月時点のものです。

●ネットするなら、スマホ（スマートフォン）がいい？モバイルルータがいい？

まず、両者に共通して言えることが、ＳＩＭロックされていない（ＳＩＭフリー）端末であることが、必須です。日本で購入した場合、契約したキャリア以外は使えないことが一般です。

現地で購入する場合も電話会社のロゴなどが入った、電話機込みのプロモーションなどで激安販売など特定の電話会社だけでしか使えないものもありますが、一般的には、ＳＩＭフリーが多数です。また、特定の電話会社だけしか使えないものを改造して、すべての電話会社で使えるようにしたものも低価格で販売されています。（ただし、ＳＩＭフリー改造のスマートフォンやモバイルルータのアップデートを行うとまたロック状態に戻ることがあるので要注意です。）

それらを踏まえたうえで、、、

○スマートフォンのみで使用する事の利点：

①プルサチャージの際、すぐに確認できる

②通話にも使用でき、いくつもＳＩＭカードを維持しなくて済む

③テザリングを利用すればＰＣなどでも使用できる

○スマートフォンのみで使用する事の欠点：

①テザリング中はバッテリーの消費が早い

②インターネットプランの容量を超えた場合、通信は途切れないが自動的にチャージしたプルサを消費していくようになり、これは、Rp.xxx/1KB といった、通常料金体系となるため、一瞬で無くなってしまい、プルサをチャージするまで通話することもできなくなることもある。

③通話とデータ通信で違うキャリアを使い分ける（高信頼性と低価格）ことが難しい（ＳＩＭカードを入れ替えれば使い分けは可能であるが、頻繁な交換は面倒であるし、スマートフォンのＳＩＭカードスロットを壊す可能性がある。）

○スマートフォンとモバイルルータで併用使用※することの利点：

①通話用は信頼のおけるキャリアで、データ通信は格安のキャリアというように使い分けができる。（非常時は、割高になるが通話用のキャリアでデータ通信もできる）

②ＡＤＳＬや光回線などは停電すると使えないが、モバイルルータの場合はバッテリがあるのでノートＰＣと併用することで停電時も使える。（マナドは停電が多々ある）

③通話での高信頼性とデータ通信の低価格性を両立でき、初期費用は若干高いものの、長期では（３か月～それ以上では）十分元が取れる。

○スマートフォンとモバイルルータで併用使用※することの欠点：

①通話できないので通話用のスマートフォンは持っているか購入する必要がある。

②プルサを購入してチャージ時に直接確認できない。頻繁ではないもののプルサ購入時は通話用に持っているスマートフォンのＳＩＭカードを入れ替えて、プルサ売りのところへ行くなどが必要となる。

③スマートフォンとモバイルルータ、また、キャリアの違うＳＩＭカードを買う必要があるため初期費用が高くつく。

※使い古したスマートフォンと買い替えた新しいスマートフォンの両方を持っていると言った場合、古い方がテザリングに対応していれば、データ通信専用機として使うことも含めます。

●いろいろな滞在ケースを考慮してどのパターンが良いかを考えてみました。

☆旅行者や短期出張者など（１週間～２か月程度）

１週間以内の滞在なら日本で使用中のスマートフォンなどを海外プランでローミングして使うとよろしいと思います。ただし、日本への数分程度の通話や、メールのチェックなどに限定します。

もし、１週間以上の滞在や１週間以内でも毎日１０分とか２０分とか通話したい、何枚もの写真をＳＮＳにアップしたいとかであれば、マナドで２～３万円前後のスマートフォン（ＡＳＵＳのＺｅｎＰｈｏｎｅ等）やインドネシアメーカや中国メーカの１万円前後のスマートフォンを購入してプルサを１万円程度（Rp1,000,000）チャージすれば、初回の合計２～４万円となりますが、それでも日本の電話会社のローミングをつかうよりも、遥かにインターネットや通話（日本への国際電話を含む）をすることができます。また、次回以降はチャージだけですので、もっと経済的で良いと思います。

さらに、スマートフォンは、そのまま、日本へ持って帰って、日本のキャリアのＳＩＭカードを入れて使用することもできます。余ったプルサは、返金できませんが、プルサを同じ会社のＳＩＭカードを使っているほかの人へ送ることができますので、現地で出来た友達などにあげると喜ばれるかもしれません。ＳＩＭカードそのものは、前述のように購入時に個人情報が登録されていますので、どこでどう悪用されるか保証できませんから、もう使わないといっても、よほど信頼する人以外には、あげない方がよろしいと思います。

※ブナケン島やマナド郊外への旅行者は、電波の関係でＴＥＬＫＯＭＳＥＬが良いでしょう。

※日本のキャリアの電話機をローミング使用する場合、電波自体はＴＥＬＫＯＭＳＥＬなどの現地キャリアを経由しますので、現地の通信状態が悪い場合、日本のキャリアであっても影響を受けます。

☆中長期滞在者など（３か月～数年以上、マナド市内在住でブナケン島含む離島を除く）

日本の携帯電話はしまっておいて（長期ならいったん解約も視野に入れて）、まず、通話用に割安のスマートフォン（おすすめは、ＡＳＵＳのＺｅｎＰｈｏｎｅ等、また、耐久性を重視しないなら、現地メーカや中国メーカのもの）とモバイルルータを用意しましょう。

スマートフォンといってもＳＡＭＳＵＮＧのギャラクシーシリーズとか iＰｈｏｎｅは、こちらでも大変高価なので、これらを購入していては、対費用効果は悪いと思います。

モバイルルータのほうは、とりあえず私のおすすめでは、ＺＴＥのＭＦ９０＋がおすすめです。このＭＦ９０＋のインドネシアでよく売られているものは、ロシアのＢｅｅＬｉｎｅというキャリアのモバイルルータを、ＳＩＭフリー改造したものですが、４Ｇにも対応しており使い勝手も良いです。価格は Rp600.000 前後。（接続設定-ＡＰＮ登録をする必要があります。）

そのほか、ＢＯＬＴ専用のモバイルルータをＳＩＭフリーに改造したものも売られていますが、ＢＯＬＴのモバイルルータの４Ｇ対応電波は特殊なのでＴＥＬＫＯＭＳＥＬやＸＬの４Ｇでは使えない場合があります。３Ｇでの使用を前提と考えた方がよいでしょう。（またＳＩＭフリー改造したものは、アップデートがありますと表示されても、安易にアップデートしてはいけません。ＳＩＭフリー改造が無効になる場合があります。「アップデートがないか確認する」といったオプションがある場合は、念のために無効にしておくとよいでしょう。）

また、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬのマナドでの４Ｇは周波数割り当てが変則なので、モバイルルータやスマートフォンによっては使えないです。ＴＬＫＯＭＳＥＬの４Ｇを利用する場合は、購入時に店員にＴＥＬＫＯＭＳＥＬの４Ｇに対応可能か確認する必要があります。店員がＴＥＬＫＯＭＳＥＬの４ＧもＯＫだといっても、実際にいい加減なこともあるので、可能なら本当にＯＫかテストを要求し、購入前提（もしくは料金を払ったうえで）で封を切ってもらい、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬの４Ｇ対応ＳＩＭ（持参または購入）で本当に４Ｇで接続されているか確認するという方法もあるでしょう。確認は、ルータの小さい液晶画面やＬＥＤランプの色などで確認します。この場合、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬの４Ｇを認識で来たら必ず購入する（前払いしたお金はキャンセルできない）必要がありますが、万一認識できなければ購入しない（前払いしていたら返金）ことも可能でしょう。

こちらでは、携帯電話に限らず、ＴＶや冷蔵庫など電化製品も怪しいですから、最低でも支払い前にテストを要求し、購入後店から出る前までに、通電して動作を確認してもらう癖をつけましょう。（さすがにエアコンなんかは取付けて室外機と室内機をつながないといけませんので、店頭でのテストは無理ですが、、、無理なものは無理してテストしなくてもよいです。）

通信キャリアの選定は、通話用にはＴＥＬＫＯＭＳＥＬ、モバイルルータにはＸＬを使用するとよいと思います。これですと、もしＸＬのエリア外のブナケン島にダイビングを楽しみに行くにしても、通話は確保されますし、マナドに滞在することが前提とすれば、写真のＳＮＳアップなどは、マナドに戻ってからでも良いでしょう。もちろん、緊急のデータ通信も割高になりますが、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬが使用できます。

なお、ＸＬにチャージするときは、前述のようにチャージがうまくいかないこともよくあるので、事前にＸＬのＳＩＭカードをスマートフォンに入れてプルサ売りのところに行きチャージして、ちゃんと入ったか、その場（←これが重要）で確認します。

スマートフォンでネット使用は、モバイルルータのＷｉＦｉ経由で使うとよいでしょう。

●中長期滞在者で田舎や離島に居住予定の方

まず、居住先の電波環境を確認しましょう。田舎でも４Ｇは少しずつ普及していますが、まだまだというところです。４Ｇが入るようであればいいですが、、、しかし、４Ｇモバイルルータは３Ｇにも対応しています。４Ｇがダメな場合、３ＧのＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３の電波が入るようなら、データ通信は、ＸＬではなく、ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３にすると３Ｇ使用の場合が費用的によいと思います。

なお、通話用のスマホでは、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬのままでよいです。

しかし、これは、田舎といっても、トモホンやビトゥンなどの「市」の場合です。

田舎も町から離れたところであったり、離島やジャングルとなると、３Ｇでも厳しい場合があります。実際にデータ通信では、３Ｇが使えないと実用性として、かなり厳しいです。

３Ｇでお得なＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３の電波も検出できない場合、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬのＳＩＭカードを試して、３Ｇの電波があるかかどうかです。この場合、通話もデータ通信も同じＴＥＬＫＯＭＳＥＬを使いますから、通話用とデータ通信用で分ける必要もありません、スマートフォンだけでよいでしょう。ただし、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬは非常に割高（それでも日本のキャリアのローミング使用より割安ですが、、、）なので無駄使いはできません。メールや調べごとなどに限定して残り残量に注意して使いましょう。

●自分の住んでいるところが４Ｇに対応しているか？

直接確かめるには、その地で、４Ｇに対応したスマートフォンで実際にどこの通信事業者の電波があるか確認してみる必要があります。しかし、使えるのが分かっていれば４Ｇのスマホにしようかと思うこともあるかもしれませんが、４Ｇが使えるかもわからないのに、わざわざ新たに４Ｇのスマホを買うのは、買い替えて、たまたま気に入った機種が４Ｇ対応であったとかは除いて、４Ｇの確認のためだけに買うというのは、マニアでもない限り誰でもためらうと思います。

近くに知人や友人などが住んでいれば、別ですが、それでも、数百メートル離れていれば、もう、電波の状況は変わってきます。また店員の話はあてになりません。インドネシアでは、大丈夫ではないのに大丈夫・大丈夫・問題ないと自信をもって言われることがあります。
「インドネシア人の大丈夫は、大丈夫でないことが多い」と覚えておきましょう。
こんな時に役に立つＷｅｂサイトがあります。

http://opensignal.com/

です。

このサイトでは、キャリアごとに実際に電波を確認できた地点を地図上に表示することができます。

データも携帯電話会社が計画したエリア図ではなく、opensignal が公開している速度測定アプリをインストールしたスマホからの応答の際の実測をもとにしていますので、信頼性があります。（ただし確認できてないエリアは、電波が来ていても地図上は空白になっている。）

●注意点

４Ｇや３Ｇを紹介してきましたが、まず、日本と比較し、品質（通信速度など）は当然よくありません。４Ｇで最高速度１００Ｍｂｐｓなどと書かれているものもありますが、実際は１～５Ｍｂｐｓぐらい出ればよく、使っている人が更に多いなど遅くなる要因はありますが、時間帯によっては、数百Ｋｂｐｓ程度しか出ないこともあります。また、絶対的な速度や安定度ではマナドの光回線より劣ります。しかし光回線はいったん問題が発生すると復旧まで、日本と違い数日から数週間も要しますから、それに比べれは、モバイルインターネットのほうが可用性は高いといえます。

それらを踏まえたうえで検討されてみてはいかがでしょうか？

●実践編

まず、今まで書いてきたようにＳＩＭフリーのスマートフォン（または、スマートフォン+モバイルルータ）を用意してＳＩＭカードも購入しました。またプルサも何とか購入できました。・・・という方が最初に直面するのは、設定でしょう。とりあえず、ＳＩＭカードをスマートフォンにセットすれば電話はできるようになります。しかし、インターネット接続はできない場合もあります。最近のＳＩＭカードやスマートフォンには事前にデータ通信の設定情報が記録されている場合がありますが、そうでない場合、インターネットはつながりませんので、このときは、自分で設定する必要があります。ここで重要なのはＡＰＮという項目の設定を行う必要があります。日本では馴染みがありませんが、これは、ドコモなどのスマートフォンは事前にドコモ用のＡＰＮ設定が固定で設定されているため不要なだけで、仕組みは同じです。ＡＰＮはキャリアごとに違いますから、わからない時はＳＩＭカードを買うときにショップに聞いてみるとよいでしょう。

○ＡＰＮの例（２０１６年６月現在）

設定項目はいろいろありますが、以下の項目だけ設定すればよろしいです。

ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ　　：

　　NAME　　：TELKOMSEL

　　APN　　：internet

　　User　　：wap

　　Password　　：wap123

ＩＮＤＯＳＡＴ　ＩＭ３　：

　　NAME　　：INDOSAT

　　APN　　：indosatgprs

　　User　　：indosat

　　Password　　：indosat

ＸＬ　　：

　　NAME　　：XL

　　APN　　：internet

　　User　　：[空白]

　　Password　　：[空白]

　ＡＰＮの設定が終わったら、もうインターネットにつながるはずですが、ここで終わりではありません。このままでは、通常料金なので、プルサがどんどん消費されていきます。したがって、インターネットのプランに申し込み、それを購入する必要があります。申し込みはいたって簡単で、スマートフォンなら各社、管理アプリを公開していますので、初回のみＧｏｏｇｌｅＰｌａｙからそれをダウンロードしましょう。申し込みと支払いは通常同時に行われ、支払いはプルサで行います。

　アプリは、各キャリアの公式サイトからのリンクで行けますが、ＳＩＭカードを買ったときに紙の封筒にＳＩＭカードが入っていますが、そこに書かれています。（その際、十分なプルサがあらかじめチャージされていることが必要です。）

　アプリをダウンロードできたら、アプリを実行してユーザ登録を行います。電話番号と名前やメールアドレスなどが必要になります。ショートメッセージで確認番号の通知が来てそれを入力する必要があったりしますので、モバイルルータで使用することが前提でも登録時は、スマートフォンで行うのが良いでしょう。

インターネットのプランまで申し込めたら、あとは、使うだけです。プランの有効期限が切れそうになったり、通信容量の残高がなくなってきたら、また申し込みをして購入すればよろしいです。（アプリのインストールや設定は初回のみ必要で、あとはログインするだけです。）

注意としては、早めに通信容量を追加しておかないと、もし容量がなくなったとき、自動的にプルサから１ＫＢ幾らといった感じで、差し引かれることになります。気づいたときは空っぽになっているなんてこともありますから、注意してください。

最後に、インターネットを使うようになったらいくつか重要なことがあります。自分の通信量を知ることです。つまり１か月に何ＧＢ使っているかを把握することが重要です。これには、いろいろなツールが出ています。またウィルス対策などセキュリティにも気を使う必要があります。特にウィルス対策ソフトのウィルス情報のアップデートは、通信量の増加になりますが、しないでおくと、ウィルス感染などの危険が高まりますからこまめに行いましょう。

インドネシアでは、日本のように通信会社ごとに携帯電話の縛りといった制約があまりありません。その代り携帯電話本体は、ＳＡＭＳＵＮＧやｉＰｈｏｎｅといった機種は、日本以上に高いです。また庶民向けには、日本には存在しない現地メーカや中国メーカの１万円を切るスマートフォンのモデルも多数あります。一部の機種は、見栄張り向けに、遠目にはＳＡＭＳＵＮＧやｉＰｈｏｎｅと見分けがつかないようなものや外装だけ本物といった非常に怪しいものも存在します。（日本では税関で没収されるかもしれない・・・）
しかし、１万円以下の安いものは、大抵、バッテリーが一番早く寿命になるようです。また、交換用のバッテリーも売っていないようです。

それでは、皆様の充実したインターネットライフを送られることを期待しつつ、また次回ということで・・・

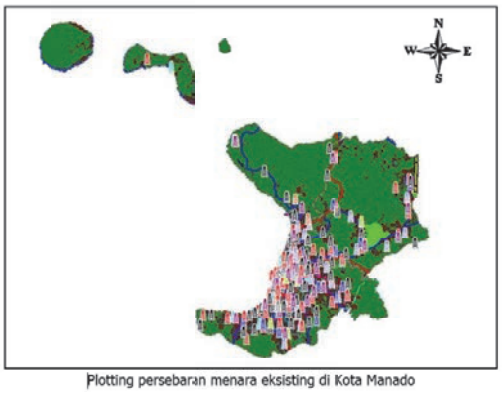
以上

※データ通信量は、上記記事を書いた後の 2016 年 7 月に Telkomsel が従来 Rp.500,000 だったプランが、案の定、Rp.520,000 に値上げするなどがありました。日本円にすると 200 円弱の値上げではありますが、できれば、普及に伴い安くなっていくことを期待していましたが、逆行のようで、がっかりなところがあります。生活水準の向上や物価の上昇が考えられますが、まだまだ質と価格（コストパフォーマンス）が釣り合っていないようです。

（続いて資料編として、２０１６年０６月現在の電波状況等を取り上げます。）

資料編

調査は２０１６年０６月現在



Plotting persebaran menara eksisting di Kota Manado

図１．マナド市内の基地局の様子

Tabel V-2 Resume Jumlah BTS yang dimiliki Telco Operator

No.	Operator Telekomunikasi	Nama Singkat	Jumlah BTS
1	PT. Telekomunikasi Selular	Tsel	118
2	PT. XL Axiata	XL	43
3	PT. Indonesia Satellit Corporation	Isat	35
4	PT. Hutchinson C.P. Telecommunication	HCPT	74
5	PT. Smart Telecom	Smartfren	11
6	PT. Axis Telekom Indonesia	Axis	
7	PT. Sampoerna Telekomunikasi Indonesia	STI	
8	PT. Telekomunikasi Indonesia	Flexi	17
9	PT. Bakrie Telecom	Esia	7
Total BTS Eksisting			305

図２．マナド市内の通信会社ごとの基地局の数

図２よりマナドでは基地局の数ではＴＥＬＫＯＭＳＥＬが１位となっています、その後にＸＬ、ＩＮＤＯＳＡＴ、３（ハチソン)、スマートフレンと続きます。また、図１からは、ブナケン島にも基地局があるのが分かります。私としては、２位はＩＮＤＯＳＡＴ、３位がＸＬと思っていましたが、基地局数では、逆だったのが、少々驚きです。（しかし、１位ＴＥＬＫＯＭＳＥＬと２位ＸＬは、２倍以上のアンテナ数で引き離されていますが...）

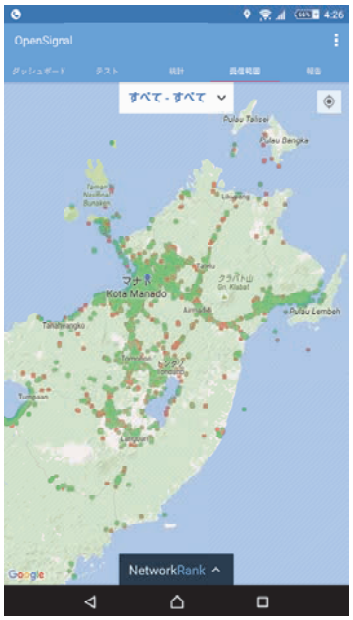


図３．北スラウェシのマナド周辺の携帯電話電波状況（すべての通信会社含む）

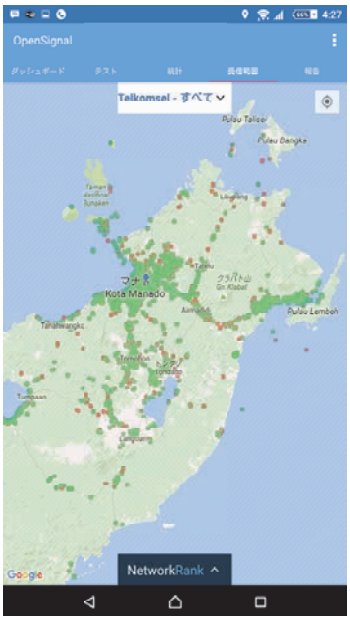


図４．北スラウェシのマナド周辺の携帯電話電波状況（ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ）

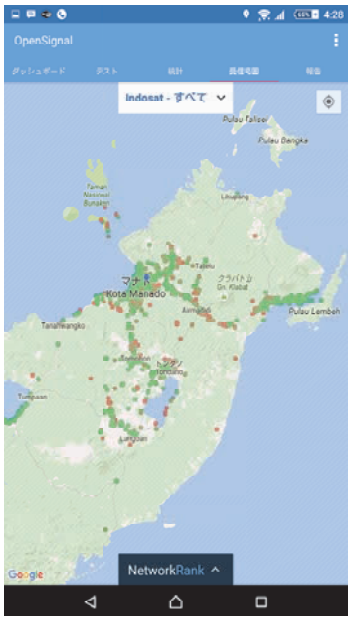


図５．北スラウェシのマナド周辺の携帯電話電波状況（ＩＮＤＯＳＡＴ）

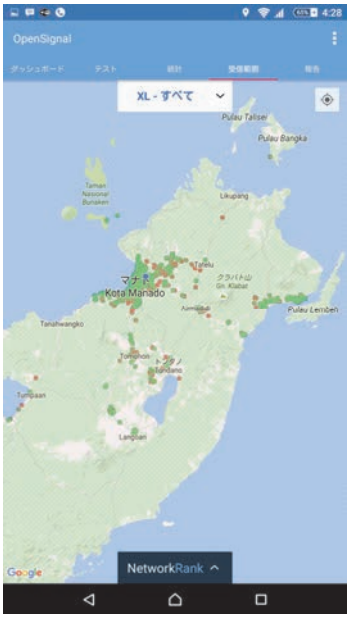


図６．北スラウェシのマナド
周辺の携帯電話電波状況
（ＸＬ）

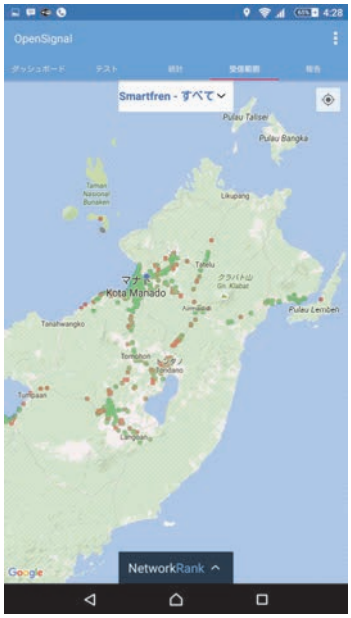


図７．北スラウェシのマナド
周辺の携帯電話電波状況
（Ｓｍａｒｔｆｒｅｎ）

図３は、マナド周辺を含む、２G/３G/４G携帯電話の電波状況を示した図です。都市部はもとより田舎でもある程度人口があるところなら、エリア内であることが分かります。また、図４，５，６，７はキャリア毎に見たエリアの図ですが、ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ以外の通信会社は、郊外やブナケン島も厳しいように見えます。（特にＸＬとＳｍａｒｔｆｅｎ）しかし、いずれもマナド市内中心部に限れば、市中はカバーされているようです。

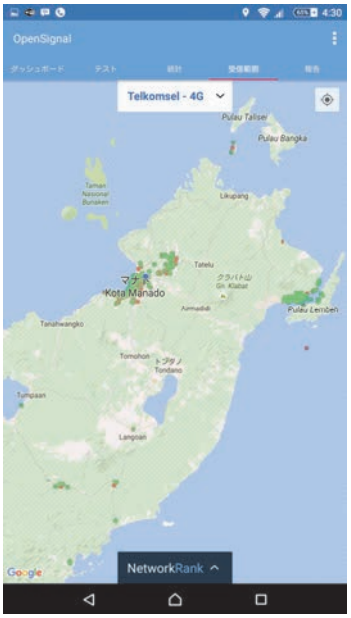


図８．北スラウェシのマナド
周辺の４G携帯電話電波状況
（ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ）

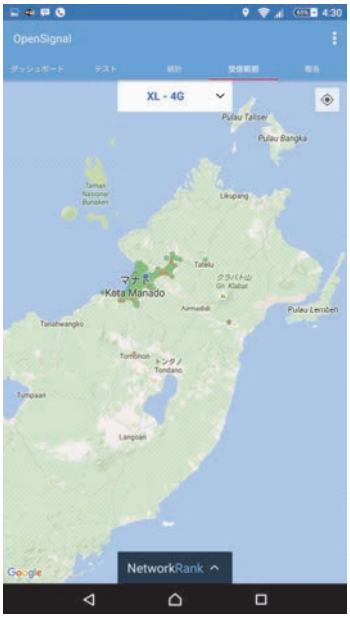


図９．北スラウェシのマナド
周辺の４G携帯電話電波状況
（ＸＬ）

図１０．北スラウェシのマナド
周辺の携帯電話電波状況
（Ｓｍａｒｔｆｒｅｎ）

４Ｇの電波に限定してみてみますと、図８，９，１０のようになりますが、ここでも依然としてＴＥＬＫＯＭＳＥＬですが、意外にもＸＬがマナド市内では追い上げてきています。ＴＥＬＫＯＭＳＥＬは、２Ｇや３Ｇの時のように、他を圧倒するほどではないようです。おそらく、電波の周波数割り当てが変則的なために、使用できるスマートフォンなどが限られ、電波はあるものの、利用者が少ないため情報が上がってこないものと思います。またＴＥＬＫＯＭＳＥＬもＸＬも田舎はほとんどダメでＳｍａｒｔｆｒｅｎが田舎も含めて道路沿いに点在しているようです。４Ｇの電波は、より直進性の高いものですから、家の中では、電波が弱くなると思われます。そのため、道路沿いに反応が出ているのではないかと思われます。

この図から市内であればＸＬ、郊外であればＳｍａｒｔｆｒｅｎが利用できる可能性がありそうです。

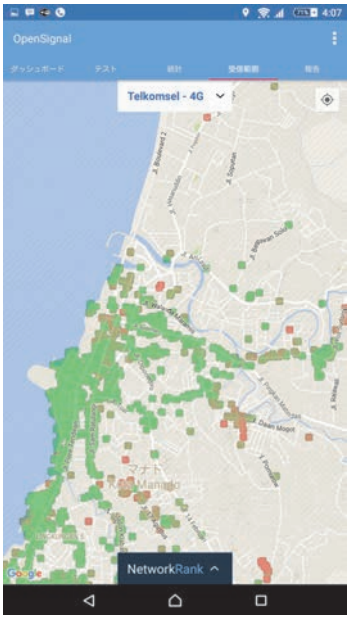


図１１．北スラウェシのマナド周辺の４Ｇ携帯電話電波状況（ＴＥＬＫＯＭＳＥＬ）

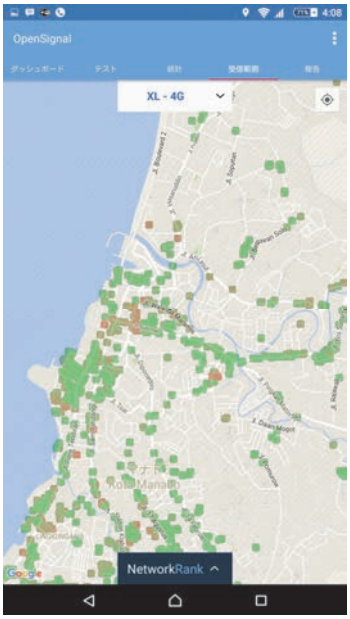


図１２．北スラウェシのマナド周辺の４Ｇ携帯電話電波状況（ＸＬ）

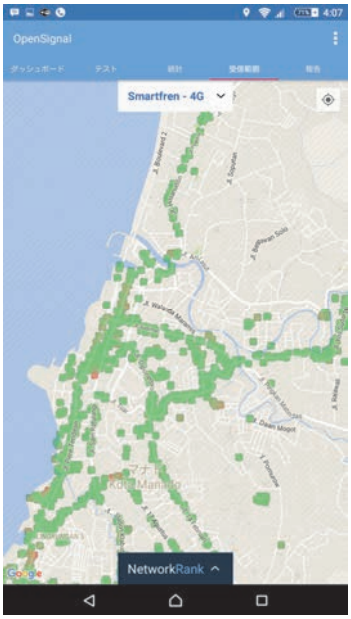


図１３．北スラウェシのマナド周辺の携帯電話電波状況（Ｓｍａｒｔｆｒｅｎ）

図１１，１２，１３は４Ｇの電波状況を市内をアップで表示したものです。ＴＥＬＫＯＭＳＥＬが若干、エリアが太目な感じです。それ以外は、どれも同じようです。

携帯電話の技術やエリアは日々進歩しています。今できないものが、来年、来月、明日できるようになるかもしれません。当初、携帯電話というものは、音声通話とＳＭＳというショートメッセージのサービスのみでしたが、２ＧのＧＰＲＳから３Ｇそして４Ｇとなってきています。通信速度も、劇的に早くなりました。しかしインドネシアの場合、規格上、高速な４Ｇでも、

回線の容量が利用者数に比べ少ないため、大変遅く感じることがあります。これは携帯電話によるインターネットに限らず、インドネシア国内のダイアルアップ接続やＡＤＳＬ（ｘＤＳＬ）、光接続など全般において言えます。日本のインターネットサービスと比較することは料金や品質ともに現実的ではなく、無意味です。

ここで紹介している料金体系やプロモーションの内容、さらに、エリア状況など、これは、あくまで２０１６年０６月の状況です。

０７月には、また変わっているかもしれません。将来もっと安くなる事もありますが、プロモーションが突然終わるなどで、高くなる事もあります。

インドネシアですから通信会社も自分たちの事しか考えてないといえば、その通りなのです。これらのプロモーションは、短期間でユーザ数を獲得したいとか、４Ｇのシステムに投資した以上、実績を作りたいとか、競合他社を出し抜きたいという通信会社の思いの下でプロモーションが生まれてきています。これは、おそらく、４Ｇの投資でユーザ数をＸＸＸＸＸ獲得したので無駄ではなかったといった事実を作ったり、国や銀行などの助成や融資を取り付けるためと思われます。したがって、目的が達成できれば、速やかに、これらのプロモーションは影も形もなくなるかもしれません。

これは、インドネシアでは物事の計画はＡ，Ｂプランのほかに危機管理として、Ｃプランぐらいまで用意しておくべきということです。携帯電話の場合であれば、通話はＴｅｌｋｏｍｓｅｌにしてデータ通信はＸＬを使いつつ、安いプランが無くなった時は、Ｓｍａｒｔｆｒｅｎを使おうとか、そういうことです。

ちなみに、マナドのＩＮＤＯＳＡＴでは４Ｇは未対応ですが、ＸＬの４Ｇプロモーションプランとインドサットの４Ｇプロモーションプランは非常に似ています。そしてＩＮＤＯＳＡＴがボーナス部分をややお得な設定にしています。明らかに相手を意識しているようです。

以上

鯨を食べよう

長崎　節夫

鯨と日本の開国

幕末の嘉永６年（１８５３）、アメリカのペリー提督が軍艦４隻を率いて東京湾口（浦賀沖）に現れ、徳川幕府に開国を迫りました。これまで見たこともない大型軍艦による威嚇に、日本中が上へ下への大騒ぎとなりました。

この、ペリー提督による開国要求の大きな目的は、日本近海で操業するアメリカ捕鯨船への、食糧、飲料水、薪などの補給にありました。

当時のアメリカ式捕鯨の様子を、私たちはハーマン・メルヴィルの小説「白鯨」によって伺い知ることができます。アメリカ式捕鯨は大型の帆船に捕鯨用の端艇（カッター）を数隻積みこみ、漁場ではこの端艇に捕鯨銃を携えた射手が乗り込んで鯨（主にマッコウクジラ）を追いかけ、仕留めます。メルヴィル自身が捕鯨船乗組員として日本近海まで来たそうです。そのときの見聞を元にして著したのが、小説「白鯨」というわけです。

幕末のころの日本近海は、はるばる太平洋を越えてやってきたアメリカ捕鯨船の草刈り場ならぬ、クジラ狩り場でした。アメリカの捕鯨基地は北アメリカ大陸の東海岸側（大西洋岸）にあります。日本近海漁場にむかうためには大西洋を南下して南米大陸の南端を回ったあと（パナマ運河はまだできていない）、今度は南米大陸の西岸に沿って北上、赤道付近で西に向きをかえ、太平洋を横断して日本近海に向かうという、気が遠くなるような長距離航海です。アメリカの母港を出発し、操業を終えて帰港するのは大体２年半を要しました。捕鯨船は仕留めた鯨から油を煮出しますが、鯨の脂皮を煮るのに薪を使います。長期の航海ではどうしても薪が不足する。食料、飲料水も不足。特に、生鮮食料の不足は深刻です。乗組員のビタミン不足からくる壊血病は、アメリカ捕鯨船にとっては常に悩ましい問題でした。飲料水も長期の航海ではどうしても不足気味になります。残った水は腐りかけてくる。目の前にある日本の港で新鮮な水・食料、薪などを補給できたらどれだけ助かることか。

また、夏は台風の接近、冬は季節風の吹き出しと、気象条件の厳しい日本近海ですから、遭難事故もおこります。遭難捕鯨船の救助や、船員の本国送還などのために日本の助力がほしいところです。アメリカが力ずくで日本に開港をせまった気持もわからないではありません。

ペリー艦隊の来航により日本では、殿さまクラスから足軽階層まで攘夷熱に感染・発症する者が続出しました。なかでも過激に反応したのが水戸、長州、薩摩です。長州藩は薩摩藩とともに攘夷運動の先頭を突っ走って、行きついた先が「明治維新」というわけです。
歴史教科書ではペリー提督が日本に開国を迫ったことになっていますが、実は、陰の主役はクジラであったという、ウソのようなホントの話です。

アメリカ捕鯨にまつわる逸話をもうひとつ。

江戸時代末期、土佐・中の浜の少年漁師が遭難。小笠原諸島ちかくの鳥島に漂着していたところを、たまたま島に寄ってきたアメリカの捕鯨船に救助されました。捕鯨船の船長は、この若い漁師をアメリカに連れ帰り、養子として学校教育を受けさせます。数年後、流暢な英語を話せるようになった青年は日本に戻り、幕末から明治維新にかけて対米外交に、あるいはアメリカ式捕鯨の導入に活躍しました。

上は日本人のほとんどが知っている逸話ですが、当時の日本近海がアメリカ捕鯨船の活動領域であったことを裏付ける話です。（アメリカ捕鯨の最盛期には約３５０隻の捕鯨船が日本近海に出漁していたそうです）

日本の捕鯨（概略）

縄文時代から現代にいたるまで、私たち日本人は鯨を食料として利用してきました。とくに江戸時代以降は捕獲技術も発達し、不十分ながらもそれなりに販売網も広がって、鯨は日本人の重要な食料となりました。調理法も進歩し、とにかくアタマの先からシッポの先まで、ほとんどの部位が食用として利用されました。食べられないヒゲや骨は工芸用の材料になります。１００%利用、捨てる部位はありません。

日本の伝統的な捕鯨は、地先に寄った鯨を数隻ないし十数隻の小舟で浅瀬へ追い込み、銛を投げ、長刀でとどめを刺すという、ほとんど原始的かつ勇壮な漁法でした。江戸時代にはこれを少し進歩させて、網をからませて鯨の行動の自由を奪う「網取り式」が考案されましたが、目の前にやってきた鯨を多くの小舟で追い詰めるということで、基本的には変わりません。
他の産業もそうですが、捕鯨業も近代化が進んだのは明治以降です。捕鯨銃という飛び道具を取り入れ（アメリカ式捕鯨）、続いて、銛を打ち出す捕鯨砲を備えるようになり（ノルウェー式捕鯨）、船にエンジンを備えて遠洋に乗り出し、昭和時代に入ると、ついに鯨の宝庫・南氷洋まで進出しました。以後、捕鯨といえば南氷洋捕鯨を指すほどになりましたが、第二次大戦で中断します。

敗戦直後、大洋漁業（現・マルハニチロ）の社長・中部幾次郎は、食糧不足打開の途は南氷洋の鯨にあると思い立ち、占領軍のマッカーサー大将に捕鯨船団の南氷洋出後許可を願い出ま

した。念願かなって昭和 ２１年（1946）南氷洋捕鯨が再開され、クジラは戦後日本の食糧事情を大いに援けました。

昭和３０年代中頃、南氷洋捕鯨は最盛期をむかえます。捕鯨といえば日本の花形産業でした。毎年、秋口になると大洋漁業はじめ日本水産、極洋捕鯨と、日本の大手水産会社の捕鯨船団が日本を出発して南氷洋に向かいました。日本の冬季（南氷洋の夏季）に南氷洋で鯨を捕獲し、桜の季節になると日本に帰ってきます。その出港・帰港の光景や、南氷洋での捕鯨船の活躍ぶりは、ニュース映画や少年雑誌のグラビアなどで常連ネタでした。わが日本に捕鯨船団あり。当時の日本の男の子たちにとって、捕鯨船団は、敗戦で消滅した連合艦隊に代る日本の誇りのような存在であったかもしれません。現代で言えばオリンピック総合優勝の期待がかかる日本チームのような存在、というところでしょうか。何しろ金メダル確実、持ち帰る獲物は何万トンもの鯨肉でしたから。

昭和 30 年代後半、私は世田谷・三軒茶屋や横須賀、浦賀方面を縄張りにして生きていましたが、クジラ食は貧乏学生にとってささやかな贅沢でした。気の利いたレストランには大体、クジラ系のメニューがありました。昼食はほとんど外食でラーメンまたはうどんというところですが、たまに懐具合によっては少し気張って鯨カレーや鯨カツなどをいただきました。当時、学生が気軽に出入りするような食堂に、トンカツやビーフステーキのメニューはありません。クジラは豚や牛の代役であったでしょうが、十分美味しくいただいていました。

時は流れて平成２６年１０月、大貫さんの案内で５０年ぶりにクジラ料理と再開しました。実に半世紀もの間、一切れの鯨も食べていなかったのです。

国際捕鯨委員会（International Whaling Commission）

なぜ、私の目の前から鯨が消えたのか。原因は、人間が鯨を獲りすぎたことです。１９世紀、帆船時代のアメリカ捕鯨から始まって、２０世紀半ばまで、アメリカ、イギリス、ノルウェーなどの捕鯨先進国、あとから参加した日本などが派手に獲りすぎたのです。そのことに気が付いた関係各国は国際捕鯨条約に基づいて国際捕鯨委員会（ＩＷＣ）を設置しました。(1948 年設立。日本の参加は 1952 から)

IWC 設置の目的はクジラ資源の適正な管理を図ろうということですが、当初、その運用は全くクジラ資源の実情に合わないもので、肝心のクジラ資源はどんどん減少し、シロナガスクジラなど一部の大型鯨類は絶滅の危機に陥ってしまいました。その流れで出てきたのが、捕鯨モラトリアムです。クジラの捕獲を中止することによって、クジラ資源の回復を図ろうというわけです。　同時に「調査捕鯨」の実施も取り決められました。鯨の資源状況や生態などを科学的に調査・検証して、今後のクジラ資源管理に役立てようというわけです。日本は調査捕鯨の実施を申請し、承認されました

アメリカなど、畜産国の陰謀

ＩＷＣで捕鯨モラトリアムが可決されたのは１９８２年です。３０余年経過した現在、一部のクジラ資源（ミンククジラ、マッコウクジラ等）は商業捕鯨の再開も可能なほど十分に資源が回復していると判定されています。特にミンククジラなどは増えすぎているほどで、他の漁業への影響が問題になっています。

しかし、（ＩＷＣ管轄内での）商業捕鯨再開のメドはたっていません。再開どころか調査捕鯨さえも継続できるかどうか危ぶまれています。

現在、ＩＷＣ（国際捕鯨委員会）メンバーのなかで捕鯨反対を主導しているのはアメリカとオーストラリアです。その他、アメリカに同調したヨーロッパ諸国、ニュージーランド、南米諸国などが反捕鯨の立場です。アメリカは、捕鯨とは全く関わりのない国々をＩＷＣメンバーに引き入れて反捕鯨勢力を増やしています。

商業捕鯨再開（もちろん条件付きで）を主張しているのがアイスランド、スペイン、日本はじめとするアジア諸国（中国は中立）、アフリカ諸国、ミクロネシア・マーシャル諸島など太平洋の国々です。

捕鯨再開派と反捕鯨派の対立。これは煎じ詰めれば、クジラは食べ物（食料）であると主張している国々と、クジラは食べ物ではない、保護すべき動物（ペット）であると主張する国々との対立です。再開派の親玉は日本、反対派の親玉はアメリカです。

アメリカやオーストラリアが「クジラは食べ物ではない」と主張するのは、ある意味、当たり前とも言えます。

アメリカは歴史的に見てもクジラを人間の食料として捕獲していたわけではありません（アラスカの先住民が食用としている例外あり）。彼らはクジラを「油を採るための原料」として捕獲してきました。技術が進歩した現在、油はクジラからではなく、地面の中から効率的に取り出すことができます。油の原料としてのクジラはもういりません。

また、アメリカやオーストラリアという国は、広大な農地を有し、大規模な畜産業が国の経済を支えています。国民は牛や羊、豚の肉が常食です。クジラなど食べなくても痛くもかゆくもない。クジラは食べ物だなどと思ったこともないでしょう。

それに、畜肉は自国民の食糧であるだけでなく、日本への重要な輸出品目であります。日本が南氷洋捕鯨を再開して鯨肉を潤沢に食すようになれば、その分だけ確実に日本向けの畜肉輸出量が減ります。「ここは屁理屈を並べてでも日本の捕鯨再開を阻止しなければならない」と決意しているに違いありません。

その昔、アメリカ海軍のペリー提督はお国の捕鯨船のために日本に開国を迫りました。現在はお国の畜産業のために捕鯨再開を阻止している、ということになりす。

クジラを食べよう

しかし、国民のタンパク食料を海に頼っているような日本をはじめとする多くの島国、さらには漁業も畜産業もままならないアフリカ内陸部の貧しい国々が、アメリカやオーストラリアなど畜産大国のご都合で食料補給の途を制限されなければならないというのは、とうてい納得できかねることです。

現在、アフリカのいくつかの国では食料不足で子供の発育不良や餓死が問題になっています。日常的に牛肉をたらふく食っている国々では想像もつかないことかもしれません。

突飛な提案ですが、クジラはアフリカの貧民を救う救援食にもなります。日本は国連分担金を半分に減らして、その浮いた予算でクジラ缶詰をアフリカの貧困地域に送り、飢えた子供たちの栄養補給にあてたらどうでしょうか。わけのわからない国連とかに多額の上納金を納めるより、アフリカの子供たちを救うほうが、よほど人類への貢献になるのではないでしょうか。

しかし、人類への貢献を考える前に、私たち日本人にも課題があります。

私自身が５０年ぶりに鯨肉を食したことからわかるとおり、日本人一般が鯨食から遠ざかっていることが重大な問題です。鯨肉は栄養価からみても食の安全面からみても、陸上で生産された畜肉などよりはりかに上質・安全なタンパク食糧です。捕獲する種類・数量をきっちり管理して利用すれば、永遠に続く人類の食糧源です。その食糧源をアメリカとか、どこかの環境団体のプロパガンダに乗せられて、日本人自体がクジラをペットだと思い込むようになってきました。人間、それぞれ好みがありますから、クジラでもワニでもペットと思うことはそれでかまいませんが、食べ物だということを忘れては困ります。忘れたことは思い出すこともできるからまだしも、若い世代は生まれてこの方、クジラなど食したことがない人が多いでしょう。クジラが食べ物であるという認識をハナから持っていないと思います。

クジラが貴重な食料資源であるとしても、食べたいと思う人がいてこその食料資源です。国民がクジラを食べ物として認識しないようでは話になりません。捕鯨関係者、とりわけ担当官庁である水産庁には、クジラ食普及にしっかり取り組んでもらいたいところです。

現在、本格的な商業捕鯨の再開はむつかしい状況にありますが、全く何もできないというわけではありません。モラトリアムの対象外となっているクジラもあります。また、小型沿岸捕鯨などは国際規制の対象外で、日本の国内法で操業ができます。ＩＷＣ管轄下の調査捕鯨もふくめて、１頭でも多く鯨を捕獲し、一人でも多くの国民（もちろん外国からのお客さんにも）に提供してもらいたい。捕鯨妨害活動で来日する環境保護団体のメンバーにも、おいしいクジラ料理をふるまってはいかがでしょうか。認識をあらためて、捕鯨再開派に転向するかもしれません。

下関、東京大阪の大都市、高知市、太地町などクジラ料理を提供するレストラン、居酒屋などは結構あるようです。会員の皆様も機会がありましたら“率先して”クジラメニューを試されるよう、お願いいたします。（完）

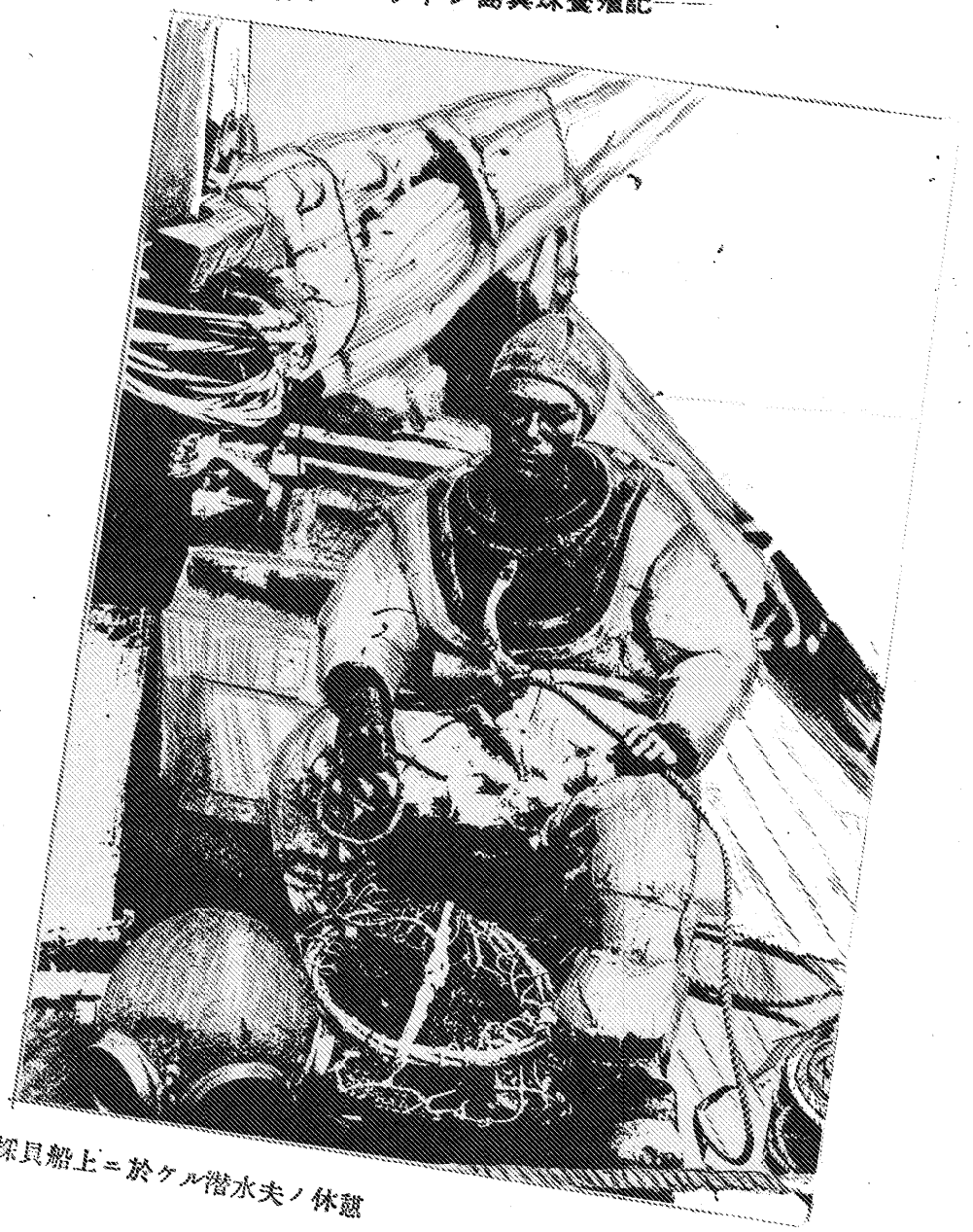
長崎　節夫

参考：小松正行「日本の鯨食文化」祥伝社新書

あるくみるきく 237

1986.11

特集■白蝶貝の海に潜る——ブトン島真珠養殖記——



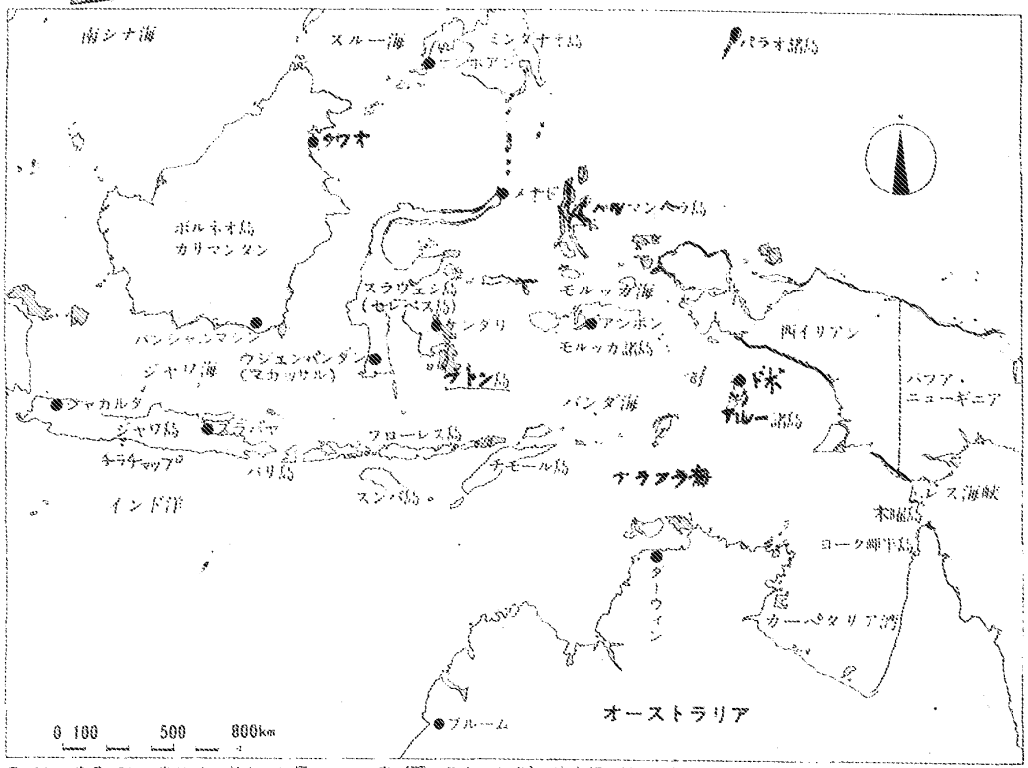
採貝船上ニ於ケル潜水夫ノ休憩

白蝶貝の海に潜る

――ブトン島真珠養殖記――

（昭和8～10年頃の撮影。以下古い写真はすべて同年代のもの）

語り・中林　茂



●ブトン島●ブトン島はインドネシア領セレベス島（現スラウェシ島）の南東部の沖合に浮かぶ、面積約4225平方キロ（沖縄本島の約二倍）ばかりの島である。第二次世界大戦前にはこの島で、世界に先がけて、日本人の手により、白蝶貝での真珠養殖が行なわれていた。

4

ブトン真珠養殖試験場

ブトン島は当時の蘭領東インド、今はインドネシアといっていますが、そのインドネシアのセレベス島（スラウェシ島）のすぐ南にある島なんです。若いころ、私はその島に行っていましてね、行ったのは昭和５年ごろだったかな・・・。それから戦争がはじまるまでずーっと、そのブトン島にいたんですよ。

で、ブトン島で何をしていたかと言いますと、ダイバーをやっていた。潜水夫です。白蝶貝というのをご存じでしょう。あれを採っていた。当時のブトン島には「鳳敦真珠養殖試験場」というのが、これは三菱合資会社の出資した会社だったのですが、ありまして、白蝶貝で真珠の養殖をやっていた。

真珠養殖というと、あなた方はすぐアコヤ貝を思い浮かべるでしょうが、南洋では白蝶貝を真珠養殖の母貝として使っていた。２，３０センチもある大きな貝でね。そりゃ、貝が大きいだけ大きな真珠ができるんですよ。

実はアコヤ貝以外の貝で真珠養殖を始めたのは、うちの会社が初めてなんです。うちの会社の岩崎小彌太が、理学博士の藤田輔世（すけよ）さんの真珠養殖の研究を援助しましてね。藤田さんは東京帝国大学の理学部を出た人ですが、西川藤吉さんの弟子だった。西川藤吉は真珠の養殖方法を発明した人です。たしか、御木本幸吉の娘婿だったと思いますよ。その西川さんの下にいたのが藤田さんで、藤田さんは日本で真珠養殖をやるのは面白くない、南方で白蝶貝でやればさぞ立派な真珠ができるだろう、というんで、白蝶貝での真珠養殖の研究をはじめたんですね。

そこで藤田さんは、大正５年からインド、スリランカ、アンダマン諸島、豪州の木曜島、ブルーム、インドネシアのアルー諸島のドボと、３年くらいかかったのではないかな、真珠養殖の適地をさがして歩き回ったそうです。今のように飛行機のない時代ですから、汽船を乗り継いでね。

貝があっても、養殖場に適しているかどうかが問題ですからね。海底の地形がよくても海が濁るようじゃ、養殖には不向きです。貝を管理するためには、貝が見えなければ。

そしてブトンが理想的だということになって、大正９年に養殖試験場を開いたんです。バウバウから９マイル離れたタンブーナというところです。そこに藤田さんの記念碑があったんです。戦争がはじまると、何か埋めてあるんじゃないかというんで壊されて、今はもうないということです。

白蝶貝や真珠養殖というと、今はアラフラ海が有名ですが、昔、アラフラ海で貝を採るのは、貝そのものを使うために採ったんです。その副産物として高価な真珠が出たんです。オランダの方のアラフラ海で貝を採る根拠地がアルー諸島のドボなんです。ドボも貝を採って貝殻を利用する。そして貝殻の中に珠があったら、それを頂戴していた。豪州の方は木曜島とブルーム

が根拠地です。

なんでこんなことを知っとるかというと、当時、ブトンで貝を採る日本人ダイバーは、全部、木曜島やアルー諸島からながれてきたんです。（ブトンの）初期にはダイバーがいませんからアルーあたりから人を呼んで使ったわけです。それで私がブトンに行ったころは、ブトンのダイバーは、みんな木曜島やアルー諸島あたりのダイバーの経験者なんです。

当時の人で古い人に坂井百助（もすけ）っていう人がいます。紀州の潮岬の出身です。この人なんかは日清戦争に行っている。日露戦争にもやっぱり行っている。そして木曜島に渡ったんでしょう。豪州の人が、東郷、東郷っていうんで、自分の子供に東郷って名前をつけたなんていってました。

私がブトンに行ったときには、６０歳代じゃなかったでしょうか。すでにおじいさんだったからね。坂井のおじいさんと呼んでいました。いたって人がいいんです。言うにことが正直で面白いんですよね。

坂井百助は、創業者に次ぐ会社の大恩人なんです。その功績にむくいて、ブトンにいる間はご飯たべさせて、月給も出すということで、会社の敷地内の整理整頓・除草などをする連中の監督をしながら、昭和７年ごろまでいましたかな。それから日本に帰りました。

坂井のおじいさんは、母貝のアリ場所を知っていたんです。オランダが白蝶貝のいるところを、このセレベスから東方を全部調査したときに、その調査団の一員だったから知っているんです。ドボで白蝶貝を採っていたオランダの会社が調査をやったんです。

私らがオトさん、オトさんと呼んでいた前田音次郎も紀州、古座出身のダイバーです。オトさんは、アルー諸島のドボで潜っていて、その後、豪州へ密航したんですよ。アルー諸島は蘭領でしたから、豪州へ行こうと思うと、密航ということになる。あの頃は密航する人がたくさんいましてね。というのも、当時の豪州は白豪主義というか、極端に悪い言い方をすると、白人にあらずんば人にあらずというような主義でして、なかなか白人以外の入国、移住を認めなかったんです。ただ、例外はあった。ダイバーだけは日本人でも入国を認めてくれていた。日本人ダイバーはそのころは優秀だと評判でしたし、アラフラ海での白蝶貝採りに日本人ダイバーは不可欠でしたからね。それでも、木曜島とかブルームとか、白蝶貝採取の基地を出てはいけなかったんです。

で、オトさんは豪州へ何で密航したのか。私は詳しいことは知らんのですが、ともかく密航して、ダイバーをやらずにサトウキビ畑に潜り込んだ。サトウキビの農園で働いたんです。警官以外の人間は、密航者がいてもワーワー騒ぎませんからね。ところがある日、オトさんは町に出て、とうとう警官につかまったんですね。それでドボに強制的に送還されて、ドボから日本に帰る途中のマカッサルでうちの会社に雇われて、ブトン島に来たんです。

また、元ダイバーの尾田勝蔵というのもいました。彼はバウバウでチーク材など、インドネシアの物産を商っていました。原住民にも中国人にも非常に人望のあった人で、りっぱな大き

な家に住んでいました。この人は紀州・串本の出身でした。日本人の奥さんがいましたが、奥さんを帰したあと、向こうで結婚して子供も何人かありました。

バウバウには無線や電話局があったので、尾田さんはうちの会社の嘱託としてやってもらっていました。

昔のダイバーというのは、アルーでも木曜島でもほとんど潮岬一帯の人だったんです。

生れは新潟県の山の中

私は明治４０年、新潟県南魚沼郡堀之内という村の生まれです。私のような山の中の生まれの者がダイバーをやるのは珍しいんですよ。

堀之内の、私らの字下島は戸数１０７戸でしたか。当時は九分九厘農家で、みな小作人だった。

私の家も、それこそ“土の一合”も持っていない。昔はそういう家が多かった。農家なんていっても、実際に田畑をもっている人が何人いましたか。ほとんどが小作人です。

今、考えると、村全体がみじめなもんでした。第一、服装がまるっきり違う。今の服装なら冷たいとか寒いなんていうことは、田舎に行っても感じませんが。昔はみじめでした。

私らの子供のころから戦前まで、だいたい、次男は小学校を出たら、すぐ東京へ放り出される。昔は、高等小学校へ行く人間だって何人もいないんだから。一家をあげて出ていく人も多かったです。

東京へ出て何をするかっていうと、手に職はないから、越後の人間は、ほとんど豆腐屋でしょう。そのかわり、まじめで骨を折るのを苦にしないから、金をのこすんです。
みんな、金を残して悠々たるもんです。だけど、世間的に知名度のある人はでない。

それで、子供のころは堀之内ですごしましたが、私は魚野川で育ったようなもんです。
魚野川は水量が豊かなんです。福島県境や上越国境から大量の雪解け水がながれてくるんです。私の村の近くで信濃川に合流するんですが、信濃川と魚野川ではまるっきり水の色が違う。信濃川はまっ黄色、魚野川はまっ青。それぐらいきれいな水だった。アユが有名で、魚沼のアユっていったらたいへん有名でした。

だから、泳ぎのほうはカッパですよ。子供のころは３人助けましたよ。昔は人命救助だなんていって表彰される時代じゃないんですよ。田舎だし、そんなことを公にするとボロクソですよ。お前があぶない川遊びに連れていくからだ。死んだらどうする、てね。

その頃から私はガキ大将で、遊び相手は自然。昔のことだから養蚕が盛んでしたが、
そんな手伝いはやらんで、山や川ばかり飛んで歩いてたもんです。そのとき鍛えたのが今の健康につながっている。そんなわけで、私は学業は劣等だけど、品行方正だったんですよ。

５年ばかり前、田舎へ行って、魚釣りにでたら、子供が５，６人ついてきた。危ないと思っ

たから「俺より川下に行ったらいかんぞ、俺より川上で遊んでいろよ」と。川下で遊んで流されたら、流れが急だから、こっちが追いつかなきゃ子供ころしちゃう。私は用心深いっていうか、用心深く育ちました。

自然とけんかして遊んでたもんですから、山でも川でも懐かしいわけですよ。3，4日泊ってくるんですが、山へ行ったり、川へ行ったり、川は魚釣り、山へ行くと春先なんかショウジョウバカマとかカタクリとか野生の花がずーっと一面に咲いて、実にきれいなもんです。

大正１０年3月、小学校を出ると同時に、その田舎を出ました。名古屋に、一家をあげて行ったんです。なぜ名古屋にかというと、私らより先に身内の人が名古屋に出ていたから、それを頼って行ったんです。

家は先祖代々、百姓のほうはやらんけれども、土木というか、建築のほうです。父親は小規模に土木・建築の請負をやっていた。田舎のことですから、道を造ったり、桶屋もやったり、あれこれですよ。

その時代から、東京にも出稼ぎに行ったし、湯沢を越えて水上へ出て、利根川の奥を越えて仕事をしに行っていた、という具合です。父親はだれかに使われたんじゃなく、自分が親分でした。

私のおじいさんの親は獣医らしいですよ。まあ、獣医といっても、学校をでているんじゃないから、らくなもんじゃないでしょうけど。馬喰ですね。

私は名古屋では織物工場に半年ぐらい勤めました。今、その工場はありません。当時は、野麦峠とか紡績工場とかが華やかな時代で、そういうところへ、私も人の世話で、行ったんですけど、あまり面白くないものですから、やはり自分の身にひとつ職をつけたほうがいいんじゃないかと、鉄工所に移りました。

鉄工所では旋盤をやっていました。紡績の機械とか、もうそれはいろいろなものを作りました。ここには年季奉公で７年ぐらいいました。

父親は大正１１年、名古屋をはらって東京にでました。おふくろも翌年、東京へいきました。ちょうど震災の年の秋です。私が東京に出たのは昭和４年です。そして１０カ月ばかり、やはり鉄工所に勤めました。

セレベス島マカッサルの町

私が三菱に入ったいきさつがおもしろいんです。

うちの親というのは、田舎を出てもずっと越後弁で、とうとう東京弁を使わずに死にました。とくにおふくろなんてひどいもんで、相手がわかろうがわかるまいが考えたことでないんです。

この父親が、奥沢（世田谷）で石垣をちょっと積む仕事をしたんですが、この石垣の家に住んでいたのが三菱の幹部なんです。それで知り合いになったわけです。

三菱の幹部の人は、親があああいう親だから、さぞかし子供も親に似た正しい子供だろうと考えたんでしょう。そんないきさつで三菱に入りました。三菱に入る前から、ダイバーとして潜ることは決まっていました。

この潜るというのは、なかなか難しいんです。水圧があるから耳や鼻の悪い人は潜れません。昭和の初めごろは、その適格性を調べる方法がなかった。だから、会社が潜るために日本で雇った人は、私で二人目ぐらいでしたね。あとは、みんな現地雇いでした。

それで、どのようにして適格かどうかを調べるかというと、隅田川の永代橋と関係があるんです。この橋は日本で初めて潜函方式によって造られた橋で、橋桁の中に空気で圧力をかけて水の侵入を防ぎながら、だんだん下へ掘り下げていくんです。この工事で、医学方面を担当したのが東大の真鍋っていう医者なんです。

この医者と、さきに話をした養殖試験場の藤田さんが友達で、その関係で調べてもらったんです。はたしていい方法であったかどうか、私は学者じゃないからよくわからないが、だけどまあ、おかげでダイバーを６年やりましたから適格であったんでしょう。

当時は、町には失業者があふれていた時代でしたから、親父も喜びました。あの会社は給料がいいですからね。神戸から南洋郵船のチェリボン丸に乗船しました。

向こうの港（マカッサル）に入れば、「日本旅館」と日本語でかいた腕章をした人がいるから、これが俺の荷物だから、ってやれば世話をしてくれるからと。その頃だから、荷物もってにげる悪いヤツはいませんからね。それは平和なもんです。

当時、インドネシアへ行く船会社は、日本郵船、大阪商船、南洋郵船、石原海運の４社があった。もう一つオランダの船会社で、ジャワ・チャイナ・ジャパンっていうのがあるんです。日本郵船は横浜から出て、パラオあたりをまわってインドネシアへ行く。南洋郵船はマカッサル直行です。昔は直行するほど運ぶものがあったんですね。

神戸からマカッサルまで１４日かかりました。それが石原海運の新しい船だと１０日かな。当時は、風と潮の具合がよくなくちゃ走らんですよ。

船の大きさは大体８千トンか７千トン。貨物船だから乗客は少ない。船尾の甲板の下、舵機室の上が空いてる場所で、このあたり一帯を客室にしていました。まあ、人だけ乗せてという時代じゃないから、立派な船を造ってもしょうがない。

三菱からは私ひとりで行きました。一緒の客は２０人から３０人くらいいましたかね。その人たちは、向こうでお店を開いていました。小売店が割合あったんです。マカッサルで降りたのは私ひとりです。あとはみなバタビア（ジャカルタ）にいきました。

マカッサルというかセレベスには、日本人はあまり住んでいなかったんです。日本人の小売店が少しはありましたが、なんといっても日本人の小売店、雑貨商が多かったのはジャワ島です。

マカッサルの町で、日本人は２０人くらいじゃないでしょうか。沖縄の糸満の人が魚を獲っ

ていましたが、あとはお店の人ですよ。小売店はこぎれいな店でした。まあ、小型百貨店、ありとあらゆるものを売っていました。

日本人の自転車屋もありました。これも紀州の人なんですね。自転車はマークかギヤ M、ミヤタです。ミヤタの自転車３台の値段がイギリスの自転車１台と同じなんです。当時、それくらい日本の雑貨は安かった。安かろう悪かろうの時代ですよ。

マカッサルの第一印象は、まあ、これが南洋だなあ、と思いました。ヤシの木があってね。マカッサルの町全体はきれいでした。それは、オランダ人が自分で住んでいる所　だから。町のなかを歩くと道路は広くて、電信柱は街路樹より低い。道路から屋敷へはちょっと距離があって、やっぱり自分らの住みよいように作っている。オランダ人はマカッサルに相当いました。

私が泊った日本旅館は、マカッサルの閑静な住宅地にありました。日本人夫婦がやっていましたが、中国人の建物を借りていたようです。ブトン島への船待ちでここに１０日ほど泊りましたかな。宿泊客はわたしのほかにはいなかったように思います。一日の宿泊代は６円だか６円５０銭だかで、そんなに安くはなかったですよ。

言葉もできないし、右も左もわかりません。だから、マカッサルの日本人会の会長に連れられて、役所に行って指紋を押したり、ひとりで旅館の近辺を散歩したりでした。

話はかわりますが、昔はカラユキさんが多かった。

私らは日本に帰ってからカラユキさんって聞いたが、むこうじゃカラユキさんていわなかったですよ。娘子軍、その頃、そういってました。私がマカッサルに行った頃は、その数は減っていました。つまり、第１次大戦で日本が勝って、戦勝国が人身売買なんてやっているのはもってのほかということで、オランダから禁止令が出たわけです。そこで、当時いた人は結婚するか、そうでなければ日本に帰ると。

それで、そういう女がたくさんいたのが、多くは結婚したわけです。７，８割は日本人と結婚したでしょう。残りは中国人とも結婚したし、現地住民とも結婚したんじゃないでしょうか。だからマカッサルには娘子軍で商売している人はいなかったと思います。

私が行ったときにはもう、そういうふうに固まっていました。日本人と結婚した人を４，５人知っています。みんないい人ですよ。そりゃ、苦労していますから。出身は天草や島原でしょう。当時、天草や島原がいかに貧しかったということです。

でも、ドボにはまだ沢山いたということです。モルッカ諸島ではドボだけではないでしょうけど、あとはたかが知れています。

カラユキさんは天草・島原、男は紀州と決まっていた。紀州は潮岬付近。海岸まで山で、何もできない所です。潮岬なんて、今でこそ機械化された漁業がさかんですが、昔は海外でなきゃならん。私らが、次男はだれでも小学校をでたら、東京へ放り出されるのと同じ。

紀州のひとは海岸で波にもまれているから、大阪へ出てもおもしろくもない。もっと志が大きいですよ。海外に出ようっていうんですから。私らの田舎なんかは、外国へ行くなどはもっ

てのほかで、東京がせいぜい。

養殖場の仲間たち（１）

養殖場のあるブトン島は、マカッサルからオランダの船で一昼夜、２週間に一度、船便があります。ブトンには１０月に着きました。

私が行った当時、ブトンの人口は、１９３０年の国勢調査では１２万か１３万ぐらいですよ。日本の１県くらいの大きな島なのに。対岸のムナ島はブトンよりも少し小さかったですか。

ブトンの首都バウバウは、セレベス島南東部から島しょ部にかけての中心地だったんです。この地域一帯を治める一番偉いオランダ人がいたのがバウバウです。現地住民はこのオランダ人をトゥアン・アイルと呼んでいました。このほかに理事官もいました。その下に、ムハ（ムナ島）とケンダリ（セレベス島南東部）、コラカ（セレベス南東部のボネ湾沿い）に副理事官がいたわけです。だからバウバウには、セレベス島南東部では、電気も一番最初につきましたし、電話局、無線局もありました。

現在はケンダリがセレベス島南東部の首都になっています。というのはケンダリには飛行場があるからね。

バウバウの市場のそばに、南郡という中国人の店があります。これは、うちの会社の取引業者でした。小切手の換金なんかもここでやってました。中国人の商人がだいぶいましたよ。日用雑貨や、他にもトウモロコシを買ったり、カポック（綿）を買ったり、タピオカ（キャッサバ澱粉）などいろいろです。

前に話した尾田勝蔵もパサール近くに倉庫を持っていました。彼はヤシ園もやってたですよ。

ブトン島には三つぐらいしか会社らしい組織はないんだ。この半島（タンブーナ）のいちばん深いところに、イギリス人の農園がありました。農園長はふだんはスラバヤに住んでいて、年に１，２回、農園の見回りにきていたようですね。名前を、なんとかホプキンスっていうんですよ。私もいちど行ってみたけど、パインがあったですよ。もうパインがいっぱいの畑で、それはすばらしい匂いがしやがてねえ。

その人が農民の見回りに来て時々滞在しているのですが、農園の使用人には、「もし、俺が農園内を見回って留守の間にオランダ人の役人が来たら、事務所に待たしておけ。ミスター・スケオ（輔世）が来たらすぐ迎えにこい」ってね、言ってたそうですね。それほど藤田さんは紳士だったんです。はい、藤田さんは責任者として、奥村雅雄さんと１年交代でブトンにいました。偉い人は１年ブトンにいて帰るんです。

うちの養殖場はタンブーナにありました。会社は農場もやるために、非常に広い面積を借りていたんです。ところが、農場には適さない石灰岩のところばかりで、借りっぱなしで税金を

納めていました。

養殖場に日本人はいちばん多いときで１８人いました。奥さんも子供も入れてです。紀州の人で現地の女性と結婚して、子供が３人もいる人がいたのですが、この人は病気で、私が行った翌年に亡くなりました。残された子供のうち、男の子は紀州からその人の兄が来て日本に連れて帰りました。女の子は奥さんに残しましたがね。

私は島野竹松さんの代りにダイバーとして行ったんですが、この島野さんは会社の連絡船の船長になりました。そして私が、島野さんの乗っていたダイバーボートに乗って、潜ることになったんです。島野さんは三浦半島の人です。連絡船は養殖場とバウバウ間、養殖場とダイバーボート間の連絡をします。食料運んだり、採った母貝を養殖場に運んだり、こういった船が２隻ありました。

現住民のダイバーも一人いましたね。マヤっていう男で、ブトン人です。マヤさんも日本人に潜水を教わったんです。それは日本人ダイバーが足りないときばかりでなく、経費の問題もありますからね。日本人を雇うと、こういっちゃ何ですが、大会社がそういうことすると、大変な経費がかかるんです。

例えば、汽船にのるでしょう。毎日手当てが１０円ですよ。宿に泊まれば手当がつく。経費は会社持ちだし、原住民のほうがそりゃいい。原住民のダイバーを雇った場合、ボーナスとか固定給が日本人より少なくてすむ。固定給は私が３０円ぐらいだから、その半分ぐらいだったかな。だが、日常生活での待遇は、日本人ダイバーも原住民ダイバーも同じです。白蝶貝を採ったら、１個３０銭の報奨金も同じでした。

マヤはおとなしい男でダイバーの経験は豊富でした。イスラム教徒ですが酒は飲んでいました。会社の使用人部屋に世帯をもっていました。原住民はイスラム教徒ですが、それで酒を飲まないかと言うと、飲むんです。断食もやりません。豚を食べないだけで。
ブトンあたりでも本当に信心している人は断食してますよ。だけど、ほとんどのブトン人やムナ人はやりません。朝、晩のアッラーアクバール（祈りのはじめに唱える言葉）もやりませんし、三つ、四つの子供がヤシ酒を飲んでいるんですから。

養殖場の仲間たち（２）

その当時、ブトンの養殖場にいた日本人ではね、浜口力夫さん夫婦とか篠木豊さん、菅原照清さん、大串梅治さん、林慧さん、岩城博さん、そうそう、私より五つ年下だったですが石川伍平もいましたね。彼は、作家の石川達三の弟ですよ。今でも私はたまに会いますがね。彼はブトンで養殖の方法をおぼえて、ボルネオのタワオに行ったんだ。タワオのスーシィー養殖場にね。

あのね、岩城博さん、彼は戦後、オーストラリアで白蝶貝での真珠養殖に成功したんですよ。

成功したとたんに亡くなってしまいましたが、やはり、うちの仲間だったんですよ。最初に言ったように、そもそも白蝶貝で真珠の養殖をやったのはここが世界で初めて。今、フィリピンのミンダナオ島のサンボアンガにしろ、オーストラリアにしろ、どこの養殖場を始めた人もみんなうちの養殖場の末孫と言っていいですから。

菅原さんは宇和島の出身だったかな。彼は白蝶貝のオペレーター、核入れの技術者、浜口さんや篠木さんはその先手の仕事をしていましたね。核入れした白蝶貝を受け取り、籠に入れて海に入れる仕事ですね。浜口さんは水中、篠木君は水上で、二人でコンビで仕事してましたね。オペレーターから、どの貝をどうするという指示があるから、それに従ってね。だから浜口さんは養殖場のダイバーだけど、母貝を沖に出て採るのでないから危険はない。浜口さんの奥さんはお勝手で炊事、夫婦でそういう契約で雇われてた。いうんですか。工作の旋盤とか、ディーゼルエンジンで発電していましたからね。

発電能力７KW のヤンマーディーゼルで、夕方の６時１５分から９時まで発電機を回して電灯をつけていました。目的は電灯をつけるばかりじゃなくて、真珠や核を磨くために特殊な機械を回しますからね。回しかたがた９時まで電灯をつけるわけです。

そして、９時をすぎると、自動車の大きな蓄電池が５０ばかりあるんで、それに切り換えて、乳飲み子のいる人の家にだけ電気をつけるわけです。あとはみなランプです。

伊藤さんや林さんは職員というか事務。事務の書類は全部英語なんで、彼らは今の一橋大学を出ています。外国で企業やっていますとね、外国の役人が見てもわかるように、英語で帳簿、日誌をつけておくんですよ。今日は貝を何個手術した、何個採って何個放したけど何個死んだ、と明細がわかるように。検査されてもいいようにね。

検査はやっぱりくるでしょうね。私ものちには１０カ月間ほど帳簿をつける仕事にまわって英語を書いてましたがね。書くことは書くけど、内容はなにもわからんのや。何十種類かの英語を丸暗記しとけばすむんだから。セレクト・カルチャア・オイスターなんてね。白蝶貝、あれでもオイスターなんですわな。パール・オイスター。

浜口さんらの技術者は、当時、給料は１００円以上になったでしょう。その当時の日本の三菱の課長の給料が１２０円くらいでないでしょうか。でも、養殖場の事務の人は２００円以上もらっていたでしょう。

会社が雇っている原住民は、全部で５０人くらいです。かれらはみんな固まって、そうですね、１５から２０戸くらいありましたかな。村がなかったところに現地の人も移り住んできたのです。

原住民が住んで、会社が土地に畑をつくろうと、決してどうこう言われません。使っていればその人の権利なんですよ。でも、私有権はないんです。

会社がやとっている連中は、３分の２くらいは会社の支給品で生活していたんでしょう。もちろん、ダイバーボートの乗組員は船で食べるし、日雇い連中は食事つきです。

ただ、真珠養殖用の籠を作っている人とか、屋敷内の草を採っている人とか、そういう人は食事つきではありません。原住民はろくなものを食ってないし、ろくな労働してないから体格が悪いんですよね。食事付きのところにきますと、適当に働いて適当に食べるものですから、みるみるうちに体格、体調がよくなります。胃拡張ででっぱっていた腹はきゅっと引っこむし、マラリアで腹が大きいのも薬を与えますとすぐに治って、みるみるうちに体格が良くなります。

ところが、原住民にとって会社で働くことは、憧れでもないんですよ。やはり強制で毎日仕事するってことは、ジャワあたりに行けば食うに困るからどうか知りませんけど、ブトンあたりでは、生きてさえいければ仕事なんかしなくていいんです。

山にいけば何でもありますわ、芋とか果物とか。そういうものを採って食えばね。でもそういうものには栄養は少ないから、今話したように会社にくればよくなるってことで。生きているだけならブトンは呑気なとこですね。

私は、ああいう生活にあこがれていますよ。今の時代はどうか知りませんが、何も考える必要はないんだ。親がどうの、子がどうの。当時はね。生きているだけならこんないいところはないですよ。

原住民は、会社に勤めてよかったとは、たいして思わんでしょう。出入りが激しかったから。（仕事が）いやになってやめたりしていましたから。でも、私のいる間、ずーっと勤めている原住民も少しはいましたよ。

原住民の給料は月給です。ダイバーボートに乗っている連中は４ギルダーから６ギルダーくらいですかな。テンダー、命綱をもってる人は２０ギルダー。だけど金の価値を知らんから、パッパッと博打なんかに使ってしまってねぇ。

潜水訓練と潜水服

ブトン島には１０月についたのかな。さっそく、その年の暮れから潜水訓練です。先生は先輩の日本人ダイバーの島野竹松さんです。島野さんは神奈川県の三浦半島の出身で、私より四つ年上です。前にもお話したように、私がダイバーとして入ったので、彼はダイバーをやめて養殖場の連絡船の船長になったんです。彼とは日本に帰ってからも、ずーっと交流がありました。もう亡くなりましたけど、お葬式には行きました。

潜水自体の訓練はそれほどかからない。そんなもの、２，３カ月もあれば・・。訓練で難しいのは空気の調整ですよ。潜水の深度にあわせて、上から送られてくる空気の量を調整せる。どれくらいの空気を保っていたら一番理想的な動きができるか。

船上からはフライホイールを回して空気を送ってきます。これは手動でした。オランダは、船にしろ、潜水ポンプにしろ機械化を許さないのです。それで、大きなフライホ、イールが二つあって、それでシリンダー内のピストンを動かして空気をおくるんです。いたって簡単な構

造のポンプだが実にうまくできている。シリンダ―内に入った空気は絶対に外にもれない。戻ってこないようになっている。

ただ、潜っている者には、送られてくる空気の量の調整がむつかしい。ご存じのように、何十メートルもある海底から魚を釣り上げると、ハラワタがとびだす。ああいう状態になったら困るのです。

深く潜りますと水圧がかかりますから、空気をあまり逃がさないようにしておく。頭に被っているいる、カツレットというのですが、その側面についている弁を絞めて、空気のボコボコをできるだけ逃がさないようにする（潜水服の内部に、できるだけ空気を貯めておくようにする）。そのままの状態で上へ行きますと（浮上すると）、水圧が下がって空気が膨れますから、浮力がついてすごい勢いで浮き上がりますね。ウワーッと、魚とおなじようになる。それで、空気の量を調整するんです。上にあがるにしたがって弁を開いて空気を逃がすんですね。また、船の上でダイバーを引っ張り上げる人が楽なように、適当な力で引っ張り上げられるようにある程度の浮力を保つようにしなくては。

だから空気の調整はむつかしいといえば難しい。

訓練しても、やっぱり一人前になって、パッと海底に潜って貝をみつけられるようになるには何年もかかります。潜れるからといって、一カ月で一人前というわけにはいかない。脂がのるには３年ぐらいかかりますね。

私が行った当時の潜水の器具、潜水服、ポンプなどはイギリス製ですよ。それから空気を送るホースね。みんなイギリス製です。日本製の“ドレス”を着て潜ったという記憶はありません。昭和十何年ころからか、日本製のドレス（潜水服）もできるようになおりましたが、これは横浜に工場があります。ドレスっていうのは潜水服のことです。頭に被るのはカツレットっていうんですよ。ペラペラの薄いものですが、丸いですからつぶれない。

それから、靴。靴は自分で作るんです。台が木ですから釘をうってね。鉛を靴底に打ち付けるのも、みんな自分でやります。それほど難しいものではないですよ。靴だなんていって難しく考えるとできない。履ければいいんです。皮はすごく厚い牛の皮でした。

きちんと型をとっておきましてね。靴の大体の重さは、片方１貫目（３．７キロ）です。深い海に入るのは１貫５００ぐらいになるかな。胸と背中には鉛を背負います。それぞれ４貫目ずつ、両方で８貫目（３２キロ）です。大ざっぱに言って、体重が１６貫目の人なら、１６貫目の装備ということです。

「ドレス」の下に着るものがまた大変なんです。それは、すばらしいもの着てますよ。ラシャのシャツと股引き、その下にはラシャのフンドシ、ラシャの腰巻き。これは会社が支給しません。自分で用意します。その上に太い毛糸の、腰までの靴下（パンスト？）を履きます。その上に太い毛糸の丸首シャツ、その上にひざ下までのラシャの半ズボンをはきます。そうしてもう１枚、毛糸の長い靴下をはきます。冷えますからね。靴下は２枚になります。

それから、カツレットとドレスを結びつける金具の下の肩当て。これは、ラシャの靴下などの古布を縫ってつくる。これがドレスの下に着ける一式です。

どうしてラシャかというと、割り合い擦れませんからね。夏服のペラペラのラシャではなくて、少し厚手のものです。それでもやはり冷えますからね、特に膝なんかね。

なぜ、フンドシをするかっていうと、水圧があるでしょう、水圧でもってドレスが皺になるんですよ。そうすると皺でもって咬まれるんです。だから、オチンチンぶら下げておくと咬まれちゃう。腿のところなんて、咬まれて真っ黒になっている。１０メートルで１気圧、３０メートルだったら３気圧だ。体の面積はどのくらいありますか。そこんところにみんな圧力がかかるんですよ。たいへんな圧力です。

白蝶貝の海に潜る

そうして訓練を終えますと、いよいよダイバーボートに乗って、潜って白蝶貝を採るわけです。ダイバーボートはオランダが動力船を禁止していましたから、２本マストの長さが６０フィート（約１８メートル）の帆船でした。船名はオリエント号です。動力を禁止したというのは、白蝶貝の乱獲をさける、資源保護のためでしょうね。

ダイバーボートの乗組員は、担当がみんなきまっています。命綱を持っている人、テンダーというのですが、その命綱で連絡を、海底から合図するわけです。もっと空気を送れ、もっと綱を伸ばせ、上がる、みんな命綱で合図をおくります。そんな関係ですからテンダーがダイバーを殺そうと思えばわけはない。空気を送らなきゃ死んじゃう。ダイバーはドレスを着ている間は絶対に抵抗できません。だからダイバーにとっては、テンダーは神様の次です。

この他にポンプ係が二人、パイプかかりが一人、船の碇綱を扱う係が一人、日本語でいうと給仕、ボーイですか、ブトン語でいうとバチョといいますが、ごはんを炊いたり雑用をする子供が一人、舵取りが一人、ダイバーは１隻に一人ですから、全部で８人が、ダイバーボートに乗っている。１隻に８人、まあ、そういうメンバーで仕事をするので、８月のオランダ女王の戴冠記念日だったか誕生日だかにはちょっと帰ってきますが、それ以外はずっと船の上で生活している。

だから船の上では全く日本語をつかいません。変わった人の顔を見ることもなし、全く人の交流がないのですから。それは、島にも寄りますから人の顔はみますよ。しかし寄る場所はきまっていますから、そこの人間の顔は見るけどよそ者の顔は見ない。だから何年たっても同じ人の顔を見ている。

１年のうち、正月と２月は会社の養殖場のある付近を根拠地にして、ブトン島とムナ島の間の海峡、ブトン海峡というのですが、その中でも一番狭いバルタ海峡、幅が４００メートルくらいだったかな、そこで潜って白蝶貝を採るんですね。狭いものだから、干満の差が大きい大

潮の時なんか、ブワット潮が行く。そりゃ潮の流れの速いとこでしたね。

南海の海底はどう説明したらいいのでしょうかね。よく、テレビで何回の海底が出るでしょう。とてもあんなものじゃあないですよ。それはきれいなものです。

ところが、そういうきれいな海には白蝶貝はいないんです。サンゴ礁のある所には。サンゴは生きものでしょう。プランクトンを食ってしまうんです。だから、貝の方へはプランクトンの配給がいかない。だからサンゴ礁の発達した場所には白蝶貝はいない。いても成長が悪い。栄養失調で早く年をとってしまう。それとは別の場所に、いろんな貝がいる場所があるんです。そういうところに白蝶貝はある。

白蝶貝は、小さいうちは移動するようです。適当な、自分が居心地がいいの悪いのか知りませんが、根を張る場所が悪いと、よそへ動いていきます。そして、岩か、何かの貝殻があるとぎゅっとくっつきます。くっつくとなかなかとれませんね。強い紐でね。潮に流されて環境の悪いところに行っちゃあ困るから。そして大きくなると潮に流されないようになるから海底に自然に転がっているんです。口を上に向けてあけていますがね。

でまあ、バルタ海峡で１月から３月いっぱいまで白蝶貝を採っている。その間に、３隻あったダイバーボートを１隻ずつ交代でドックに上げるんですね、船の修理に。

深水（フカミズ）、つまり深い海では、８日間働いて７日間休む。何故かってのは後で申しますが、その休んでいる間に船をドックに上げるんです。というのも、熱帯地方は船喰い虫が多いですから、喫水線から下の船側や船底には全部銅板をはってある。木の外板に船舶用のタールを塗って、毛紙というんですか、紙を貼って、その上に銅板を張る。その銅板の剥げた個所を修理したり、その他デッキなどは檜皮を打ってきちんとしてね。また遠い漁場に出ても、船を暮れまで修理しなくてもいいように準備しておくんですよ。

そして４月に入ると、乾季の初め頃ですが、今度はムナ島の裏側に出ていくんです。ムナ島の裏側をまわってセレベス島の南端のローラというところ、そこにひと潮かふた潮（１５日～３０日）くらいいますか。

それから次は、ローラの東のマンチャロッカに移動します。７月頃には、今度はサパクタに移ります。最も長期間いて潜るのがこのサパクタです。これはちょうどムナ島の西側の沖で、ムナ島から５～６マイルぐらいの距離ではないですか。

サパクタというのは、サッパは島の人の言葉で砂の島ということでして、周囲をサンゴ礁が取り巻いていて、その真ん中にダーッと長い砂だけの島があります。満潮になると、そのほんの一部だけが顔をだすだけで、潮が引くとサンゴ礁の広い面積が干上がって、その真ん中に砂の島がのっているという、そんなところでした。　サパクタの海は１２，３メートルの深さでしたかね。

パルタ海峡は深いんですよ。浅くても２０メートル以上、深いところは４０メートルくらいになります。いわゆる潜水病になりやすい場所です。

それは、浅い海、私らの言葉でいうと浅水、深い所は深水というんですが、浅水の方が潜りよいですよ。というのは、海には大潮と小潮があるでしょう、大潮の、潮流のブワーッと行くときにはもぐれませんからね。深水ではひと潮（１５日間）の間で、７日間もぐって８日間休む。ところが浅水では１１日間もぐって４日間ぐらい休む。大潮のほんとに潮の速い前後に休むくらいですね。いくら海が浅くても大潮のときは潮が速いですから。潮が止まったな、と思っていると、すぐまたツツーっと潮が動きはじめますからね。それでも浅水になると潮の流れもゆるやかですから、朝から晩まで潜れるんです。

深水では潮の流れているときは休んで、潮止まりにしか潜れない。ボートにあがってから次に潜るまでの間を潮休みと言っていましたが。潮が止まるのは１日に４回ある。上げ潮が上げきって（満潮になって）止まって下げ潮にかわるまでの時間、その間に潜るんです。次は下げ潮がとまって（干潮になって）上げ潮にかわるまでに時間（満潮・干潮は１日におよそ２回ずつあるので、合計４回の潮止まりができる）

わかりやすく言うと、私らが潜っていたのは浅いところでは東京湾並み、深いところではでは相模湾並み。東京湾のような浅い海では１か月に２２日間潜り８日間は休む、相模湾のような深い海では１か月間で１２日潜れるだけ。まあ、私らが入れるような深さは、大体５０メートルが限度じゃないでしょうか。５０メートルといっても深いですよ。海底には１０分間くらいしかいられない。

潜るときは、貝を入れる篭をもって降りるんです。降ろしてもらうのではなく自分で降りる。案内のロープを先に放り込んでおいて、それを伝って、自分の体に合わせたスピードで降りていくんです。４，５０メートルともなると、海底に着くまでにだいぶかかりますよ。１０分近くかかるのではないかな。すーっとはもぐれませんからね。

潜っている時間はだいたい１日６回潜って４時間。１１回潜って６時間８分なんて記録もあります。深水の場合だと、４回潜って都合１時間８分なんて記録があります。が、実際に海底にいるのは１回で５分くらいのものですからね。２０メートルくらいのとこだと、１回に１，２時間入ってられますよ。まあ、そんなに長く入っている必要ないから、上にあがりますけどね。

だけど、４，５０メートルの深さだとそうはいかない。水圧の関係でしょうが、息が続くだけの体力があっても、目が見えなくなってしまう。目の先が黄色くなっちゃって。あんな仕事はやるもんじゃないですよ、

まあ、浅いサパクタで１１月はじめ頃まで潜りますかね。その間、さっきのマンチャロッカに行ったりしますけど、それはほんのひと潮だけです。まｔ、８月の３０日か３１日の例のオランダ女王の祭りに、ちょっとタンブーナの根拠地に帰りますが、すぐ戻ってきて１１月のはじめまでサパクタで潜る。

それから、次はトベヤ諸島のほうに行くんですよ。セレベス島とムナ島の間のティオラ・ス

トラート（ティオラ海峡）で潜ります。ここで二潮くらい潜りますかね。

ティオラストラーとは広いようでも陸地が見えます。山も見えますし、そういう目標になるものが見えないと、私らも潜るヤマが立てられないのです。よく、ヤマを立てるってね、釣りでもいいますでしょう。

ティオラストラートは幅がだいたい５マイル（約８キロ）ぐらいあるんじゃないでしょうか。ただ、漠然と海に潜っても、どこにでも白蝶貝があるというわけではないですから、海底の状態、環境によって生物は変化しますから。それで私らもヤマを見て潜る。それでリーフがいたるところにあるでしょう。潮が引くと（干潮になると）リーフのアタマが出る。そういうところに棒を立てるわけです。ヤマを立てるために。あの木、あの山が９０度にある場所の海底には白蝶貝が多いとかね。そいう木は、たいていはマングローブの適当な木を切っておったてておくんです。１年くらいしか持ちませんけどね。

このトペヤ周辺のティオラストラートで１２月の２０日過ぎ、最後の潮まで潜って適当に切り上げて、月末の２９日か３０日にタンブーナの根拠地に帰ってくる。

こうして根拠地を離れて遠くに行っている間は、ずっとボートの上で暮らしているんですよ。それは潮休みのときは、島に上陸もしてみますよ。ちょっとした村もあるし、買い物もあるしね。でも生活はすべて船の中、キャビンの中でしたね。キャビンといっても、それはすごいもんですよ。東京の日雇いの人の泊るところ、あれより悪い。

陸に上がれないのはサパクタで作業しているときでしたね。サパクタではどこにも上がれない。砂の島ですから。よそのとこはどこでも上陸しようと思えば上陸できたんですが、サパクタでは作業している現場に船を留めて休んでいました。

ただ、船の水が不足してくるでしょう。そのときはムナ島の河口まで行きましてね。そこで休みました。水汲みは潮休みしている日に行くんですが、丸木舟を１隻買っておきまして、その丸木舟で川上まで行って、舟に水を汲んで曳いてくるんです。もっとも、そんな作業は私はしませんよ。船に乗っている現地住民の仕事でしたから。

バジョー人のサメとナマコ

１年のうち８カ月くらいは根拠地をはなれて出かけているんですが、では、採集した白蝶貝をどうしていたかっていうと、連絡船が定期的に来て、養殖場まではこんで行くんです。ダイバーボートには水槽があるし、連絡船にもそのための水槽があります。

補給船（連絡船）は日を決めて来ていました。一時、根拠地との連絡に伝書鳩を使ってみたこともありましたがあまり効果はなかったですね。

連絡船は月に１回はやってきました。その船で米などの食料や雑貨などを運んでくるんです。米、塩、しょうゆ、玉ねぎ、コーヒー、コンデンスミルク、砂糖、石鹸、マッチ、その他まだ

ありました。潜水用具も前の便でたのんでおくと持ってきますし。

米は、セレベス島のマロスって、今のウジュンパンダンの飛行場のあるところ、その当時はマロスって言っていたんですが、あのへんの米はいい米でしたよ。日本人が食べるのはマロスの米、現地住民が食べるのは日本でいう南京米のような米でしたね。もっとも、ボートに乗っている間は、皆、同じ米を食べますが、根拠地に帰ると、いい米は私とテンダーだけ、潜る人と、潜る人の縄を持っている人だけです。だからテンダーは原住民でも、待遇は日本人並みです。会社から、私とテンダーには副食代費として一人当たり２５銭支給されますが、その他の人は１０銭でした。その金で、現場で土地の人からニワトリとか買って食べてるわけです。

野菜は乏しかったね。たとえば、日本からナスなり何なりの種を持っていくでしょ。本当は黙って持って行ってはいけないんですがね。その種を播くと、１年目はいい野菜ができるんですよ。それで、それから種をとって播くと、それはもうボケちゃってて、
いい野菜はできないんです。

でも、現地のナスもトマトもあるんです。ナスは、暑いところですから年がら年中ありました。それで何年でも枯れないんで、すごいんですよ。木のようになるんです。１本でも８畳の部屋いっぱいくらいになるんです。それこそ種と皮ばっかしのカチカチのナス。それでも野菜といえば野菜ですから。トマトは小さな種類でした。

その他では、レイシというニガウリみたいなものもありました。現地の人はそれを茹でて野菜代わりに食べるのです。場合によっては、バナナの花、紫色の花びらで、これはズイキみたいなものですが、スープにするとおいしかったです。

それからワラビがありましたか。ワラビはいろんな種類があるもんですね。現村）地住民は、アジみたいな魚といっしょに油で炒めて食べていました。

魚は私らも釣ったが、根拠地の付近ではカンポン（村）の連中も釣ったりしていましてね。それを買ってたべた。だから魚は豊富だったですよ。また、ムナ島とセレベス島の間の浅い海では、スダテというのかな、日本にあるのと同じような方法で魚をとっていました。魚でもエビでもね。それからバカニというのかな、ハート型をした竹で編んだ籠、それを海に放り込んでおくと、勝手に魚が入ってくるんだな。このバカニでは１１月頃になると大きなエビがたくさんとれました。ところが、いくらエビがたくさん獲れても、現地の住民はそれを商売にしようという気は全くないんだな。

今はどうかわかりませんが、当時は浅い場所にナマコも多かったですね。タリパンススというナマコがいるんです。タリパンというのは現地語でナマコ、ススは乳。乳のような突起がいくつもあるナマコです。これは私らも採った。根拠地に帰ったら食べようか、と言って適当な数をとって、腹を割って内臓をだして干しておく。で、根拠地に帰って大潮で休みのとき、アヒルの肉とかキクラゲとかタマネギを混ぜて料理するんですよ。そりゃあ旨いですよ、タリパンススは。

現地の人は、このタリパンススは食べませんね。別の種類のナマコはその場で煮て、すぐに食べていましたが。タリパンイリという小型の黒いのは多かった。でも私らの商売ではありませんし、食べるに必要な分を採るだけでした。

カキも採りましたよ。おかずがないからカキを採ってやれ、さあ、カキを採ろうと思っていると、思うようになくてね。でも、食べる分くらいは取れましたが。

潜っていて気をつけたのはサメでしたね。サメは多いんですよ。原住民というか、アウトリガーの丸木舟に一家族が乗り込んで暮らしているバジョー人というのがいますが、彼らはナマコを採ったり、サメを獲ったりしてたようですね。

このあたりはサメの本場ですよ。だからサメのヒレを取って中国人に売ります。彼らはウナギをサメ釣りのエサにするんです。それはサメの大好物。彼らはウナギを食べない。私らも食べなかった。土地の人が食べないものは私らも食べなかった。

サメの肉は食べます。サメの場合はだいたい燻製です。ゲンコツくらいの大きさに切って、串に刺して、火にあぶって燻製にします。そしてそれを、海から離れた奥地の人々と物々交換していました。

バジョー人は潜りが達者ですよ。素潜りで１０メートルくらい潜ります。泳ぎも達者なものですね。家の下は海ですから（水上家屋に住む）。バジョー人がサメに食われたという話も時々聞きました。だから、私らも潜水服を着ていてもよほど気を付けないと。

サメというのは、目はこんなところにあって口はこんなところにある。あんな不細工な魚はないわけです。パクっと食いついたって、目と口の距離があるからとんでもないところを咬んでみたりする。だから危ない。

私らも、今日のおかずにとイセエビを獲ると、籠にいれてすぐ上にあげちまう。イセエビはサメの大好物ですから。上へあげるのがめんどうくさいからと腰にぶら下げていると、サメは私を目当てでなしにエビを目当てにするってことがあります。それでガバッとやられる。ですから最初に気をつけて、エビを獲ったらすぐ上にあげちゃう。

沖縄の糸満の人なども、インドネシアではずいぶんやられているでしょう。まあ、いろんなことをいいますよね。長い越中フンドシをぶら下げていればいいとか、あれがいいとか、本当のところは私ら知るよしもありませんが、こういうふうに気をつけていました。

潜水病にかかる

ダイバーは危険な仕事でしたね。私らが潜れる限度というが、だいたい５０メートルぐらいじゃないですか。５０メートルといってもふかいですよ。海底には１０分くらいしかいられない。もう、目がへんになる。周りが黄色くなって何もみえなくなります。だから大金を貰わなくっちゃ勤まる商売じゃない。命と引き換えだから。

私も盛りの頃は相当ね。いいときは、月に６００円くらいになりましたからなあ。当時、６００円なんていうと大変ですよ。普通の人は一生働いても稼げない。

自分のことをいっちゃあれだけれども、親の借金３千円を７，８年で返しました。昭和のはじめですから、３千円って大変ですよ。

白蝶貝は１日６０個も採れたら多い方じゃないでしょうか。潮の流れ、干満がありますから、朝から晩まで潜れるもんじゃない。

白蝶貝１個につき３０銭の報奨金を会社が出すわけです。５０個採ったとして１５円ですよ。１５円なら給料の半月分です。給料は基本給が３０円です。いいときは、どこかの一流会社の社長よりいい。

しかし、私らにすれば、それぐらい貰わなくっちゃ合わない。ダイバーってのは潜水病てのがあるでしょう。これが命にかかわる。

潜水病はパラリスっていうんですがね。アラフラ海ではずいぶんこれで死んでいますよ。どっかで聞いたんだが、昭和１１年だったかな、１４人死んだって聞きました。

潜水病の他には、ローマテキっていう病気もありましたね。こりゃ、オーストラリアの言葉ですよ。急性リュウマチと思うんですが、それで関節にくる。こりゃ痛いですよ。
ああいうところだから薬がないわけです。で、昔からの習わしでしょうが、フライパンで塩を熱くして、それをバナナの葉に包んで痛い個所にあてる。いやあ、これは悲鳴をあげるくらい熱い。で、今度は熱いのと痛いので、あんた、もうたまらんですよ。それで夕方にローマテキにかかっても、翌日には痛いのはなおります。げっそりやせますがね。

けど、パラリスはそうはいかない。これは私もかかりました。もう、死に損なったんですよ。これで私は、誰か代わりのダイバーがきたら、ダイバーをやめようと決心したんですから。それで会社に申し出て、あとで辞めました。

潜水病にかかったのは、ダイバーをはじめてから５，６年たった頃だったですね。９月でしたか、マンチャロッカの深い海です。深く潜らないとかかりませんから。４０～５０メートルぐらいの海じゃなかったでしょうか。

それで何回か潜って、白蝶貝を４５個拾ったんですよ。ああ、もう５個拾えば５０個になるなあと。じゃあ、俺、もう１回潜ってもうひとつ拾ったら上がるからなあ、って潜った。お昼の１時ごろだったかな、ご飯たべてからだから。

それで潜ってね、上がるときは引っ張り上げてもらうのですが、２０メートルくらいのとこまで上がってきていったん止まり、そこで２０分くらいぶら下がっている。体を水圧に順応させるんです。そして次は１０メートルくらいまで上がって、そこでまた１０分休む。

その１０メートルくらいのとこまできたら気分がわるくなってね。こりゃ、パラリスがきたな、と思っていたら上まで引き上げられた。そこで意識不明になったんですよ。

船の上の者は、「あっ、こりゃあ変だぞ」というので、また、下におろしたんじゃないです

か。で、はっと気が付いたら、あたりは真っ暗なんですよ。で、なんせ寒くて、冷たいですからね。ながく海に吊るされていると、海水がドレスの中にしみ込みますから。で、上にあがる合図をしたんです。上がったら夜の７時ころでしたから、６時間くらい吊るされていたんですかね。線上には、他の日本人ダイバーが駆けつけて来ていまして、彼が私のガラスを取った。だが、まだダメだ、てんで、またガラスを付けて、ポーンと海に放り込まれた。それで１１時ごろまで海に吊るされていましたかね。

どうにも冷たくてしょうがないから上に合図したんですよ。今度は大丈夫でしたが、そういう経験があるんです。

それで、翌日はケロッと、と言う具合にはいかないんですね。翌日もやっぱり体が痛く、どこか重くて、全体的に動作が鈍いというか、動けませんでしたね。

潜水病になっても案外周囲はおどろきませんね。でも、例えばローマテキで関節やらたときなんか、皆が笑っていますよ。「おまえ、金鱈に食いつかれたんだ」って。関節にお金が食らいついたと言うですね。

実際、ダイバーはお金と体や命の交換でやってますからね。何の教育のない者でも、すごいお金もうけができる。たとえばその病気を貰ったときは、貝を５０個拾った。ということは、オランダのお金で１５ギルダーの報奨金になった。てことは、当時の為替レートで日本円に換えると２０円くらい。１日で２０円ですよ。当時、普通の人は１日働いて１円か１円５０銭の時代ですよ。だから「金鱈が食らいついた」なんて言われる。

でも、潜水病のときは笑ってられません。命があぶないんですから。アラフラ海では潜水病で何百人と死んでいますからなあ。不幸じゃなあ、昔は。

アラフラ海で潜っていたのは、紀州の人が多かったんですね。事故で死ぬとのは２５歳くらいまでで、そのへんが一番あぶない。元気がいい、体力があるから無理をする。無理をしても自然の力にはかなわない。それで死んでしまう。

その年代を越えると、人間はずるくなる。コツを知ってくるわけです。あっこれは変だな、これはあかん、これはやめようって。何となく予感が働くんです。ところが２５歳までヤツは第六勘なんか働かないんですから。あるのは元気だけだ。

うちの会社では、事故はありません。そんな無理はしません。会社からも注意されていますよ。三菱ともあろうものが、そんな変な、恥ずかしい思いをするなと。

死んだのはドボ、木曜島あたりのダイバーです。木曜島のダイバーの親方は外人でしょう。外人だからそういう（安全）管理はしない。ただ、ボートをやって、食料やって、貝を採らすだけ。あとは知ったことじゃない。人間の管理なんてことはやりませんから。

私たちダイバーは怪我したら潜れませんからね。無茶な遊びはしないんですよ。鉄砲撃ちに山に行っても、装備はきちんとして怪我しないように、それは細心の注意をしましたよ。

病気というのもあまりしませんでしたね。私は医者でないから知りませんが、伝染病にもか

かりませんでした。たぶん、人の交流が全くと言っていいほどないから、病が移ってこないんじゃあないですか。コレラなんてのも、今は外国へ行ってはもらってきていますが、私らはそんなことはなかった。

ただ、怖い病気はというと、熱帯潰瘍。（皮膚に）ポッと穴が開いてきまして、体力の弱い者は熱をだしたりしてたいへんでした。足に潰瘍ができるんです。会社の奥さん連中で患った人もいます。

マラリアは風土病ですからこれはしょうがない。私は赴任した翌年にかかりました。あるとき、ものすごく熱いんですよ、体が。もう焼けるほど熱くて、しかし、意識はしっかりしているんです。おかしいなと思って体温計で測ってみたら４１度か２度あった。そこでキニーネ飲んだんです。キニーネは会社から皆に支給されていた。あれ飲むと胃を侵されるんでね。でも、マラリアに罹ると飲まずにはいられない。飲めば適当な時期になおりますから。

それから３年間はマラリアに罹らなかった。体力があったんですね。「強い」って、皆に驚かれたんですわ。さあ、３年たったら今度はちょいちょい罹った。だからマラリアは、私ら病気だとはおもっていなかった。かかったらキニーネ飲むか、ってなものですよ。

急性肺炎はちょいちょいありましたね。肺炎はそれこそあっという間に死んじゃう。ところが我々は、いくらか抵抗力があるから罹らない。向こうの言葉で、「サキッサプラ」というんですがね。抵抗力のない現地の人は罹っていましたがね。さっきまで元気だったのに、家に帰ってあっという間に死んじゃった、ということがありましたね。

私は品行方正だったから、例の病気にも罹らない。だから、病気なんかほとんどしなかったんですよ。何年たっても同じ人の顔しか見ていない。だから伝染病には罹らない。でも、浦島太郎になるんですよ

根拠地のタンブーナだけではないんですよ。首都のバウバウだって定期船が寄るのは３週間に１回でしょう。で、よそから来るのは、ブギス人の船が交易に来るぐらいでしたからね。

真珠の育つ海

私らの白蝶貝の採集は、貝を殺さない、養殖するということで、オランダ政府から許可になっているんです。日本でも、例えば、アワビの小さい、１０センチ以下のものは採ってはいけないことになっているでしょう。

白蝶貝も同じで、原則として採ってはいけない。けれど我々は貝を殺さずに養殖するという条件で、小さいモノも採っていい、こういう意味で許可になっていた。もし、原住民が潜って採るんでしたら、１０センチ以下はいけない。

それで、採ってきた貝は、養殖場にもってきますね。そうすると、貝を採った海と養殖場は海の条件がちがうので、貝を養殖場の海で慣らすわけです。海底の条件、潮の流れも違います

からね。

慣らす場所は、水深１０メートルくらいの浅い海です。養殖場自体は水深１５メートルくらいですがね。

そうして慣らして貝の体力をつけてから、今度は真珠になる核を貝のなかに入れて、放養というんですか、海のなかに入れておきます。

核を入れるのは先にもお話したように、宇和島の菅原さんでした。朝から夕方まで、養殖場の桟橋の先でやっていましたね。　白蝶貝の核入れは、私は担当でないから詳しくは知らない、というより秘密ですからね。

固く閉じた貝の口をどうやって開かせたかというと、無理にこじあけたりはしませんよ。開けようたって開くものではない。口を閉じる力はすごいものですよ。指なんかつぶれてしまう。坂井百助さんなんか、指の先が２本くらいつぶれていましたからね。貝に咬まれたんですよ。

大きな籠にね、貝を立てておくんですよ。そうすると、パーッと自然に口をあけますから。そしたら、クサビをパクっと入れておくんです。そうやって手術する。

核は小豆つぶくらいのものでした。これはアメリカのミシシッピー川の貝を輸入して、日本で丸く加工するんです。この貝はカキと同じような二枚貝です。そして殻が厚いんです。厚くないと丸みが出せませんからね。それが、高価な真珠になるんですね。

核を入れて海にいれて、３か月後にいちど上げてみる。そこで核が入っているか調べて、入っていなければまた核をいれる。核を吐き出す貝もありますからね。入っていればそのまま海に戻して放養して、また３か月。３か月ごとに上げて調べるんです。成長に応じて大きいものにかえるんですね。

２回ほど上げてしらべると、いい玉ができるかどうか大体見当がつきます。手術する人の腕によって上手下手がありますが。菅原さんってひとは上手だったんですが、それでも１００パーセントっていうのは無理です。貝にもよりますしね。

真珠の養殖に適した貝っていうと、そうですね、人間でいうと１８，９歳くらいが一番いいですね。貝なら、３，４年目くらいのものでしょうかね。

ダイバーは、貝の大小をかまわず採る。それを養殖場で生かしておいて、娘十八番茶も出花というふうになったら、手術するわけです。大きさでいうと２０センチくらいですわな、と思いますが。

まあ、そうして大事にして、上手な人が手術すると、１００個やって３か月後に死ぬのは５個以内じゃなかってでしょうか。下手な人は２０個も３０個も殺します。

それでどのようにして海に入れるかと言いますと、海底に１００メートルの長さで６番線くらいの針金を張っておくわけです。針金の両端にはセメントの重りをつけて沈めておくんです。それに、それぞれ６個の母貝を入れた籠をしばりつけておくんです。こう、常に新しい潮が籠にあたるように、うまく配置してね。１本の針金に何個の籠をしばるのかは知りません。私の

担当じゃないから。でも、かなりつけてありますわ。

この母貝を沈めている海は養殖場の前の海ですが、浮標は立てていません。貝があるってことを知らせることになりますから。盗る人はいませんが、用心してるんです。

余談になりますが、白蝶貝の貝柱はおいしいですよ。原住民もたべてるでしょうね。この貝柱を天ぷらにしてごらんなさい。もう、こたえられない。立派な貝柱ですからね。あんまりおいしいんで、会社では、めったに私らの食事には出さない. みだりに食べさせると味をしめて、食べたがるから。

それで、核入れて海に沈めてから３，４年で真珠ができます。そうしますと真珠だけ取り出して、その貝にまた核を入れて養殖するんです。日本のアコヤ貝だと、そんな手のかかることをしていたら商売にならない。真珠も小さいですしね。またそんなことをしなくても、母貝もたくさんありますから。アコヤ貝は包丁を入れて、開いて、いわば殺して真珠を取り出すんですな。

白蝶貝はそうじゃない。籠に立てておきますと、プワーッと口をあけますわな。そこへ楔をパッといれる。それで中の真珠をとりだして、また別の核を入れ、楔を抜いて、また放養する。だから貝は殺さない。貝のほうで死ぬのは仕方ないですよ。、故意には殺しません。

それでも、白蝶貝を養殖に使えるのは、せいぜい２回くらいでしょう。３回目くらいになりますと、成長が鈍りましから。成長が鈍るってことは、貝は大きくならないのに殻ばっかり厚くなるんです。こういう老貝は、核を入れても真珠の成長が鈍いわけです。

できた真珠は、こちらで選別して日本に送るんです。それで、一部はパリの三菱商事に送ったかもしれませんね。

貝の中には天然真珠を抱いているものがあるわけですよね。その中の、丸い、いいものを核にして貝にいれて、よりよい真珠をつくろうとしたんですよね。そうした一部は、パリに送ったんじゃないでしょうか。

だけど、ほとんどの真珠は日本に送っていた。そして日本ではそれを再選別して、それで販売したんでしょう。

でも、今のように装飾品をネコも杓子もという時代じゃないですから、思うようにはいかなかったんでしょう。後には、丸の内にあった南洋真珠株式会社が販売したようですよ。三菱商事はご承知のとおり、真珠ばっかりあつかっているわけでも専門でもない。それで販売のほうはあんまりうまくいかなかったと思います。

７年ぶりの休暇

私はながいこと内地には帰れませんでしたよ。運が悪くてね。オランダが交代の人間の入国をなかなか認めてくれなくてね。仕方がなかったんですが。

休暇で日本に帰るのは大体３年から５年のあいだに１回、職員、つまり学校出の人は大体３年に１回内地に帰れる。３年に１回で内地に約９０日の滞在が普通。それで往復していると、だいたい５カ月から半年かかります。

私らのような教育のない者の休暇は５年に１回、これは情けなかったですね。昔は教育のない者は、どこの会社でも一人前扱いではないですからね。戦争にまけたおかげで、私らも一人前に扱われる世の中になれたんですから。今は平等で、努力しだいで抜擢してくれますからね。

そういうこともあって、私が休暇をとれたのは昭和１２年になってからでした。丸７年ぶりに内地に帰れたんです。

昭和１２年の正月早々に現地を出て、マカッサルから船に乗って、神戸に上陸して、家に着いたのは２月８日だったかな。

あの時代はおもしろいですよ。船に乗ると、海が時化ようと時化まいと、乗客が食べようと食べまいと、既定の量のご飯を炊くんですね。それで海が時化ると、皆、船酔いでご飯をたべられないでしょう、で、残ったご飯は全部、厨房の者が共同で干しておくんです。そして、“おこし”を焼く。

また当時、向こうでは砂糖（ザラメ）が安いんですね。それを乗組員が、うんと買いこんで船に積んでおくんです。そして内地に着いて上陸前に、「中林さん、あんた砂糖を持っているか」と聞くんで、「持ってない」と答えると、「じゃあ、あんたの名前を貸してください」というんです。当時、外国からの砂糖は、１俵なら無税でもちこめたんです。お客さんの名前を借りると、その分余計にもちこめることになります。そしてこれが、船員の余禄になったんですよね。“おこし”のほうも、上陸してから売るんです。やっぱり余禄ですよね。

この休暇から帰った翌年の昭和１３年でしたか、私がダイバーを辞めたのは。内地から代わりのダイバーが来ましたから。鈴木直治さんといって、今は大洋漁業につとめていますが、彼が私の後輩というか、オリエント号のダイバーになったわけです。

代わりの人が来たってことは、だれかが辞めて日本に帰って、その人の旅券の枠を利用したってことですがね。新規にはオランダはなかなかビザを出さないんです。

ダイバーを辞めてからは、島野竹松さんがそうしたように、連絡船の機関長や船長をやったんです。収入はダイバーのときよりガクッとへりましたがね、月給分だけですから。それでも百四、五十円にはなったかな。日本内地の課長よりはいい給料ですよ。だけど、そうなるとやっぱり寂しくなりますね。

どこの会社もそうでしょうが、外国勤務は給料の他に手当がつく。

（中略）

どぶろくもあるし、それを蒸留した酒もあった。透明な液で、買って瓶にいれて、しばらく涼しいところに置いておくと、コバルト色になってねえ。それで火をつけるとボッと燃える。

ソッピーという酒でしたが、それを専門につくる村もあったんですよ。ガランパという村で、だから私らはソッピーをガランパといっていました。本来ならブトン人はイスラム教で、酒を飲んではいかんのだが、ブトン人は平気のへっちゃらで酒を飲んでいました。

まあ、そんなわけで金の使いみちはいくらでもある。こういっちゃなんですが、私は日本では悪遊びはしたことがないんですよ。が、向こうではひととおりのことはやってみた。３０歳を過ぎて覚えたんです。それで酒も博打もやったが、自分の小遣い銭の範囲をでるような、そんなバカはしたことがないですね。

その頃はまだひとり身だったし、私が結婚したのは戦後、内地に帰ってからですしね。それでブトンでは多少は遊んだが、それでも品行方正の枠は守っておったつもりなんですよ。

ブトン真珠養殖の終末

ブトンで連絡船の船長をやっていた昭和１６年１２月８日でしたか、養殖場に海からと陸からとオランダの兵隊が３０人ぐらい来たわけです。ところが、兵隊を見ていても、私らは太平洋戦争がはじまったのをわからんのだから。

私は機関室にいて機関を動かそうとしたところに、３人の兵隊がピアッときまして、鉄砲つきつけて、それでも私はまだ気がつかなかった。一体なんだ、とおもった。そうしていると事務所の方から私に「中林君、鉄砲渡して」という連絡が北。猟銃を持っていましたから。それにピストルも１丁あったし。

それで、自分の部屋へ行って鉄砲を渡した。そして、荷物の整理しようと思って行きかけたら、「中林君、そんな行かなくてもいいんだ」と言うんですよ。

「どうしたんですか」と聞いたら、「今朝、戦争がはじまったよ」というもんですから、「へエー」と、ポカンとなった。

会社には短波のラジオ受信機がある。ところが、なにか大きな事件がおこる１週間くらい前になると、必ず故障しやがる。ドイツ製の短波ラジオだが、第二次大戦のドイツが戦線をおこしたときも故障、ヒトラーがソ連に宣戦布告をしたときも故障、日本が参戦する一週間前も故障してさっぱりわからんかった。

ただ、スラバヤの支店から１２月の５日に、遅くとも１５日までに全員スラバヤに来い、という電報が入っていた。しかし、ここの定期船は３週間に一回しかないので、予定表を見たらダメなんです。それで、１日でも早くいこうじゃないかということで、バウバウの政府に交渉に行ったわけです。会社の船があるので、それでセレベスに渡る許可をくれ、と。

そしたら、「お前の会社はオランダとの契約で、バウバウを中心に１５０マイル以内だ。それ以上は出られないからダメだ」というんです。

それにしても、いつでも出発できるように用意しようじゃないかということになって、６日

の日に、ムナ島方面で仕事をしている者を、私が迎えに行ってきた。全員会社に集めた。

それで、全員、荷物を整理しようという結論になって、「明日からやろうや」と言って、１２月８日の朝、はじめたところに兵隊がやって来たんですよ。

それで日本人は皆、と言っても当時８人しか残っていなかったんですが、オランダの兵隊が「これからバウバウに行ってもらう。持ち物は何を持ってもいいから支度しなさい」という、そういう命令だった。

そこで、自分の身のまわりの物をオランダの船にはこんで、会社の食糧をみんな積み込んで、バウバウに行ったんです。バウバウでは兵舎の営倉に入れられて、それまで雇ってわからないということで、かえって落ち着いた気分になりましたね。

結局、バウバウの営倉には１週間いました。それからブトン島をパトロールするオランダの船に乗せられて、セレベス島のワタンポネに上陸させられて、そこからトラックでセンカンに、センカンに２週間いて、月末の３０日に、ちょうどすごい雨の時期でしたが、マカッサルに移動した。マカッサルからは、３，４千トンの船のどん底に、これがひどいんですよ、電灯もない真っ暗な中に入れられて、スラバヤに送られました。

マカッサルには、セレベス島のメナドやモルッカ諸島などから７，８０人くらいの日本人が集められていましたね。子供もいましてね。

そういっては何ですが、ウチは三菱で大会社でしょう。手際がいいから、昭和１６年の８月にオランダが外国の会社の資金凍結をしたときに、ブトンやその他の地域にいた日本人の妻子を全部、日本に帰しちゃった。しかし帰さない会社もあった。南太平洋貿易なんか、帰さなかった。そういう会社は、女、子供が残っているわけですよ。

スラバヤに向かう船の船底では、そういう子供たちが「おじさん、水ちょうだい」なんて、水を欲しがってね。悲惨なものでしたね。

スラバヤからは汽車でインド洋側の漁港チラチャップに連れていかれました。貴社は贅沢なもので、チークの薪を焚いて走っていましたね。チラチャップには、ジャワ島、スマトラ島、シンガポール、マレーシアなどから約２千人くらいの日本人があつめられていた。そしてそこで全員が船にのせられた。

さあ、今度はどこに連れていかれるか、てんで見当がつかない。それで、こりゃアフリカ行きだろうな、とおもっていたら、オーストラリアのアデレード港に入港した。そこからまた汽車に積み込まれて、オーストラリアのずっと内陸部のラプティの収容所に送りこまれたんです。

そのあとはですね、昭和１８年に捕虜交換が成立しましてね、私は運よく収容所を出られて、またブトン島に帰ることになったんですがね。ブトンの真珠養殖はそれで終わりでしたね。真珠養殖どころの話ではない。なんせ、戦争ですからね。

まあ、向こうの戦前の、真珠貝採取や養殖のことを知っているのは、私の年代の人で最後でしょうね。

何年か前、朝日新聞に、私と同じ年代の人で、木曜島でダイバーをやっていた人が、今も木曜島かどこかに住んでいて、仲間のダイバーのお墓を守っている、という話が載っていましたが、まだその人は無事なのかどうか。いずれにしても、昔のことを知っている者は、もう少なくなっています。

なんのかんの言っても、ブトンはいい島だったですね。ぜいたくさえ言わなければ、山に行けば食べ物はなんでもあるし、あくせく働くこともないしね。のんびりとね、ブトン人は幸せですよ。私もあこがれていましたね、あんな暮らしに。

もう一度、ブトン島に行ってみたいですなあ。

あとがき　・・・中林さんとの出会い、その後

中林茂さんのブトン島でのダイバーの体験談は、東南アジアの庶民の歴史や文化に興味と深い共感をいだかれ、「バナナと日本人」「マングローブの沼地で」など、多数の著作を著しておられる鶴見良行さんを中心に、インドネシアの農業経済等を勉強している福家洋介、同じくインドネシアにほのかな憧れをいだいている観文研の森本孝の３人が、世田谷区奥沢の中林さんのお宅を訪ねて、前後４回にわたってお聞きした話をまとめたものである。

私たちと中林さんの出会いは全く偶然であった。今から３年前、鶴見良行さんが世田谷市民大学で、インドネシアのアンボン島やブトン島の木造帆船などについての講演をされたが、その聴衆のなかに中林さんがいらしたのである。講演の後、中林さんは鶴見さんに「私はそのブトン島で昭和５年から白蝶貝を採るダイバーをやっていた」と話しかけ、鶴見さんをびっくりさせた。よもや聴衆のなかに、インドネシアの辺鄙な島嶼のひとつであるブトン島に、十数年間も暮らしたことのある人が混じっていようとは、鶴見さんも思ってもみなかったのである。

その翌年、中林さんとの出会いが刺激となって、鶴見さんと福家は、中林さんが暮らしていたというブトン島に渡ってみた。しかし、そこにはもはや、中林さんらが白蝶貝を採り、真珠を養殖していたという形跡は何一つみつからなかった。

帰国後、私たち３人は再び中林さんにお会いした。日本人でブトン島の真珠養殖やダイバーの暮らしを知る人は少ない。放っておくと歴史の中で埋もれてしまう。日本人とブトン島とのつながりを、どんな形であれ残しておかねばならない、と思えたからである。お会いしてその旨を伝えると中林さんは、覚えている限りは何でもお話いたしましょう、と快く体験談を語ることを承諾して下さった。

そこで３人は、１回で約１時間ずつ４回に分けて、ブトン島での日々についてお話を伺い、それをまとめたものが本号の特集である。中林さんのお話の内容は、出身から太平洋戦争でオーストラリアに抑留されたことなどに及ぶ幅広いものであったが、その中心はダイバーとしての体験談であった。すでに喜寿を過ぎておられる中林さんだが、その記憶はすばらしく、私た

ちはしばしば驚かされたものである。

中林さんの語りはまだ終っていない。この先、いつまで続くかわからない。そこで、あるまとまりのある部分だけでも活字化しておこうと考えて、今回はダイバー体験の部分だけをまとめさせていただいた。

さて、その後の中林さんのはなしであるが、オーストラリアに抑留されていちからがたが、昭和１８年に日本軍連合軍の間に捕虜交換協定が成立し、アフリカのロレンソマルケサス港で釈放されてから、再びブトン島に戻っている。また、昭和１９年に一時日本への帰国を果たすが、次にはボルネオ島のバンジャルマシンに渡り、そのまま終戦を迎えている。いずれも中林の意志以外の別の力が働き、そうせざるを得なかったようである。中林さんが帰国を果たしたのは昭和２１年になってからである。帰国後は三菱の社員としての生活にもどり、定年まで勤めておられる。しかし、さすが、アラフラ海では何百名もの犠牲者を出した過酷なダイバー稼業を耐え抜いてこられた人だけに、体は頑健で、今でもかくしゃくとしておられる。地元の老人クラブの先頭に立って、さまざまな社会奉仕活動に参加してもおられる。

私たちも中林さんがいつまでも元気であられることを望むとともに、今後もその深い人生の話をお聞きしたく思っている。

なお、本号の中林さんのお話は、福家洋介と森本孝が共同で整理し、文章化したものである。

（以下略）

（福家洋介・森本孝　記す）

編集部補記

本稿は「タルシウス」第１７号（平成２１年８月）に掲載された記事の再掲載です。原本は旅行雑誌「あるく　みる　きく」２３７号ですが、原本ではなく、この記事の部分だけのコピーを入手して、前回（第１７号）ではそのコピーをそのままコピーして掲載しました。不鮮明でほとんど読み取れない状態でしたので、新たにワードで打ち直しました。一部、どうしても読み取れない部分を割愛しましたが、インドネシアの白蝶貝真珠養殖を語る貴重な資料です。

はじめまして

高野　智子

北スラウェシ日本人会の皆様、こんにちは。
高野智子と申します。
5 月末にマナドに移住して今日で 2 か月が経ちます。

私がマナドに来たきっかけは、とても単純で、夫が「ホテルノボテルマナド」で働いているためです。5 月まで、ずっと東京ーマナドで遠距離交際をしていたのですが、結婚を機に一念発起。長年勤めた出版社での仕事を辞め、ほぼ 2 週間でバタバタと移住準備をし（日本での私はかなりのワーカホリック女子でした）、ほぼ徹夜明けのフラフラとした状態でこちらにやってきました。飛行機からマナドの街並みを見た瞬間、「ああ、ずいぶん遠いところに来てしまったなあ！」と思う気持ちと、「どんな生活が待っているんだろう？」とワクワクする気持ちの両方で胸が高鳴ったのは今でも覚えています。

日本での生活とは 180 度違う、のんびりとした毎日が始まりました。
住んでいるノボテルホテルには、毎日様々な国のゲストたちがやってきます。「タンココ国立公園」に生息する百面相ザルを見に来た、という日本人ツアー客の方々にも会いました。空港に近いので、ダイビング帰りに 1 泊、というダイバーのゲストも多いです。最近では中国人のツアー客たちが何台もの大きなバスとともにやってきます。
併設するコンベンションセンターでは、週末になると盛大な結婚式が行われます。
親戚のそのまた親戚、友達の友達、そのまた知り合いまでもが参列し、新郎新婦を祝福するマナド流の盛大な結婚式。ホテルのスタッフとしてこっそり参加させてもらった時は、とても楽しかったです。まるで映画にでも出てきそうな、ど派手な会場デコレーション、服もお化粧も過剰なぐらいに華やかに盛った女性たち、スピーチする人が多すぎてなかなか食事までたどり着かない・・・そして深夜まで続くダンスや歌。街をあげてのお祭り？のような雰囲気に圧倒されました。

移住してから 1 ヶ月ぐらいの間は、夫と、時には一人で、街のあちこちを見て回りました。いろんな驚きと、楽しい発見がありました。いつでも渋滞している車とバイク、歩行者がごちゃまぜな道路。Pineleng の山奥にある滝を見に行った時は、地元のおばちゃんが山道を裸足

で歩く姿にびっくり。ブナケン島やシラデン島のキレイな海。街に近づけば近づくほど多くなるペットボトルやゴミの山。。。

ラマダンの時期にはムスリムのゲストに向け、ホテルでアラビア料理のイベントも行いました。外にテントを張り、アラビアンナイトのような雰囲気の中で、こちらで初めてできたイスラム教のお友達と語り合ったのは今でも忘れません。マナドは他宗教に寛容な街、というのは移住前から聞いていましたが、実際に住んでみて日々それを感じています。信仰するものは人それぞれだけど、皆とてもおおらかで親切。そしていい意味で物事にアバウト（いい加減？）なのは、時としてありがたくも感じます。

まだ移住して２ヶ月なので、ホームシックはないのですが、食べ物に関しては無性に日本食が恋しくなる時があります。そんな時は Mantos3 の「丸亀製麺」に行き、肉うどんといなり寿しを食べています。（これがとても美味しい！）日本人会の今泉さんに教えていただいたメガモールの「グラエル」で日本の食材を買い、ホテルで一人日本食を作るのも密かな楽しみになっています。

夫の仕事の関係で、マナドで暮らすのは、おそらく 2017 年の春ぐらいまでになりそうです。それまでに、たくさんの人に出会い、文化や言葉を学び、マナドを思い切り堪能したいと思っています。

編集後記

平成２８年5月１３日　呉市の大之木英雄様ご逝去
平成２８年5月２１日　MANADO 市　Floortje Helena Somba（小寺夫人）ご逝去
去った5月、当会関係者２名、たて続けの訃報でした。

大之木様には何回か、タルシウス年初号の巻頭挨拶をいただきました。以前はほとんど毎年、マネンボネンボの元山記念霊園慰霊祭を主催されていましたが、３年前に体調を崩し、ご高齢のせいもあって回復しないままに逝去されました。享年９３歳。第１４期海軍飛行科予備学生。終戦時海軍少尉。（株）大之木ダイモ会長。

Fioortje Helena さん、この２年ほどは体調を崩されて、たまの懇親会にも出席されませんでした。難病（腎臓）を患って、長年の闘病生活でした。享年６０歳。

あらためてご両名のご冥福をお祈りいたます。

第１７号掲載の「白蝶貝の海に潜る」は、原本（コピー）の状態がわるく、１７号でも非常に読みづらくて気になっていました。今回、暇にまかせて全文打ち直しを試みました。
写真が抜けたのは残念ですが、文章としては一応読める状態になったと思います。白蝶貝真珠養殖の歴史資料として価値の高い記録です。
中林氏の時代から７０年を経て、今泉会長や木谷副会長が白蝶貝真珠養殖の第一線で活躍しています。今泉会長が連載中の真珠養殖日記もまた、中林氏の後をつなぐ貴重な記録です。次号以降も頑張ってください。木谷さんも次号掲載の約束をしています。ご期待ください。
帰国中の下村さん、バリ滞在中の江田さん、アチェで禁断生活を送っている（かもしれない）大貫さん、いつも有意義で楽しいお便りをありがとうございます。
中村さんご夫妻は北九州から北スラウェシに移転してきました。まだ、移住に関わるあれこれで落ち着かない様子ですが、居住地がはっきり決まりましたら改めてお知らせいたします。
クジラはマグロ漁業の天敵である、ということで、長崎さんは「クジラを食べる会」の会長に立候補しました。応援、よろしくお願いいたします。
表紙は羽根井さんです。リオ・デ・ジャネイロではなく、メナド郊外環状線(Ring road)のキリスト像です。

（長崎）
平成２８年７月

北スラウェシ日本人会会員名簿 (2016 年 6 月 1 日現在)

北スラウェシ日本人会会員名簿につきましては、不特定多数の皆様がご覧いただける、インターネット公開版では、個人情報保護の観点で、名簿の公開を差し控えております。ご了承ください。なお、会員に配布しております、製本版の会報では、引き続き公開しております。

会員の消息、尋ね人などは、北スラウェシ日本人会まで、直接メール等で、氏名、返信連絡先、お問合せの目的などを明記されたうえで、お問い合わせください。会員が在籍し本人からの同意が得られた場合は、ご連絡差し上げます。